

伽耶子

風鈴が鳴った。伽耶子は、心持ち身を屈めて軒先を見た。ガラスの楕円には、赤い金魚が泳いでいる。その向こうの空は、高く遠い。秋の空。

伽耶子は、つと手を突いて立ち上がり、軒先の風鈴を外した。

「ちよつと買い物に出てくるわね」

玄関の方から姉の声が聞こえた。

「はい」

伽耶子の返事は、引き戸の音と重なって、消えた。

手持ち無沙汰に、玄関の方を見遣った。しんと静まり返っている。縁側からサンダルを履いて表へ回る。玄関から門までの敷石の脇には、サルビアが並んで咲いている。炎天下の似合う紅い花。けれど、真っ赤な色はすでに褪せ、秋風にカサカサと乾いた音をたてている。足早に門へ向かった。郵便受けの内側に夕刊が入っている。それを手に取った。長屋門の脇戸が開いていた。外へ出てみた。

目は自然に、坂の上へと向けられる。この門の前を通って登りきったその場所。待ち人はいつも、角を曲がって、そこに唐突に姿を現す。伽耶子は毎日ここに立って、それを迎えた。一週間前までのことである。

小さく溜め息をついて踵を返すと『プープー』というラッパ

の音が聞こえてきた。反対から坂を登って来る豆腐屋の姿が見える。豆腐の入った大きな木箱を積んだ自転車を曳いている。年寄りなのか、若いのか、伽耶子にはよくわからない。男は、表情を崩さずに目の前を通っていく。真面目なうつむきかげんの横顔。子供の頃からずっと黄昏時に、ここですれ違ってきた。

伽耶子は、戸を潜り、中へ戻ろうとして、もう一度坂の上を振り返った。それは、いつもの小さな遊び。一心に待つ時、わざと視線をはずしてみる。そして、振り返る。その瞬間、心臓の鼓動が少しだけ早まる。期待はいつも空振り。でも、ひがな一日待つときには、これを何度も繰り返す。

坂の上に、待ち人の姿を見たくて、あまりに多くの時間を使い過ぎたのかもしれない。今そこからは、刷毛で描いたような雲と赤く染まった空が、ぽつかりと伽耶子を見下ろしているばかりだ。

坂を急ぎ足に登って来る姉が、彼女の名を呼んだ。伽耶子は、悪いことをしていた子供のように、俯いてしまう。

「夕刊？」

姉が尋ねる。伽耶子は、黙って頷く。

一週間前、伽耶子は二十歳になった。その翌日、姉の部屋に呼ばれた。

「もう少し大人にならないとね」

姉の言葉は短く、そして重かった。

伽耶子が大人にならずにいることを、許してきてくれたのは姉だった。姉がこの家を守り、彼女を守ってしてくれた。二十歳になった。姉の言うように、一步を踏み出さねばならない。

夕方、兄を迎えに出るのをやめることにした。自分でも、本当につまらない一步だと思う。

「どうしたんだ？」

姉妹に声をかけたのは、伽耶子の待ち人だった。角を曲がって坂を下りてくる。逆光に浮かぶシルエットは背が高く、四肢が細い。

「新聞？」

兄は伽耶子の手から夕刊を取った。そして、姉に話しかけながらサツサと門を入って行く。伽耶子は、無口な兄なのに、その場の雰囲気を感じてくれたのを感じた。

二十歳の伽耶子、三歳年上の兄、十歳年上の姉。お手伝いさんが一人。それが、この古い屋敷の住人である。庭には樹齢百年を越える木々。これが地方の山であるなら、違和感もないのだろうが、東京のそれもこんな住宅密集地である。不思議な光景だった。航空写真で見れば、もっとよくわかる。この緑の重なりが、ポツカリと異空間を作り上げている。

兄の姿は、この森によく似合う。背が高く均整のとれた体になさな顔。肌は少し浅黒くて、きめが細かい。筋肉質ではない

のに、薄い皮膚の下に素晴らしいバネを秘めている。動きに無駄がなく、柔軟なしなやかさが、引き絞られたエネルギーを感じさせる。美しい映像に魅せられるかのように、伽耶子は、兄の流れる所作を目で追うと、その残像を心に描きながら、いつまでも視線を外せなくなる。

夕食後、姉妹は食器を片付けていた。土間のついた古風な台所の板の間で、三人は夕食をとる。今時珍しい一人膳。話のなさを補うように、テレビがつけられている。が、それも食事を終えて消された。静まり返った中で、茶碗を洗う水音と、外から木々のざわめきが聞こえる。伽耶子は、この静けさが好きだった。姉がいて、兄がいて、自分の居場所のある静けさだった。

お湯が沸いた。伽耶子はお茶を入れた。姉が茶筆筒の上の果物駕籠から柿を手にとった。頂き物であろう。玄関前の木が毎年見事に実をつけるが、まだその時ではない。包丁を手にながら、

「柿とお茶つて、よくないって言ったかしらね？」

誰に聞くともなく、尋ねた。

「柿は冷えるっていうけど、さあ、どうなんでしょう」

伽耶子が答えた。答えながら、兄の方を見る。奥のソファに寝転んで本を読んでいた。

盆にのせたお茶を持って行くと、視線を上げた。伽耶子と目

が会う。本など上の空だったことがわかる。

伽耶子には、兄の心が見えるのだ。

会社の非常階段の所に一人の女性がいた。兄を上の方にしていたのは彼女。兄の記憶に、彼女が花束をうけとっている場面が重なる。彼女は今日退社した。そして、昼休み、廊下ですれ違う兄を人目のない非常階段へと連れ出した。最後の別れを言う為に。でも、誰かが階段を上がって来る。男子社員が一人。彼女の目……彼女の目……。兄の心から、戸惑う彼女の目が見える。女の口が動いた。

『八時半に珈琲館で待つてるから』

伽耶子が柱時計を見る。同時に、兄も時計を振り返る。八時になろうとしていた。

二人は戸惑ったまま見詰め合った。

(でも、もう、彼女にかけて言葉がみつからないんだ)

兄の心が呟いた。

そして、伽耶子には兄にかけて言葉がみつからない。

兄がその女性と出会い、つきあい、この別れを迎えるまで、ずっとその心を見つめていた。兄の記憶はいつでも伽耶子の記憶であり、穏やかに彼女の中へと流れ込んで来る。兄の中に見える彼女の真摯な瞳から、伽耶子は、多くのことを読み取ってきた。今、やっと別れる決心をつけた彼女の潔さは、むしろ伽耶子の心に悲しい。

「このままじゃ……」

伽耶子は喋りかけた。が『このままじゃいけない』とまで、言い切ることは出来なかった。兄の記憶を共有しているからといって、何が言えるというのだろう。

柿ののった皿を、姉が盆の上に置いた。わざとのように大きな音をたてた。いや、わざとなのだ。言葉に出して会話することが約束になっている。今、姉の前で、二人は言葉のない会話をした。伽耶子は姉と兄を交互に見て、戸惑ったまま俯いた。兄の女性関係を自分の口から姉に説明する訳にはいかない。それを察して、

「今日、森佐菜子さんという人が会社を辞めたんだ」

兄が重い口を開いた。

「僕と同期で、この一年半いっしょにやってきたんだけど」

言葉が途切れた。

「同期というだけじゃなくて……」

間が空く。

「田舎に帰って、結婚することになって、今日退社したんだ」

(どう言葉にしたらいいのか？ 説明しても、どこか事実と違う気がする)

「ふられたってわけ」

「うん、いや……うん」

「はっきりしないのね」

「はつきりしないのね」

姉は、柿をひとつ口に放り込んだ。

「最後に、今夜会いたいって言われたんだ」

兄は、それきり押し黙る。姉の言葉を待っている。

しばらくは、柿を味わっている風の姉だった。

「一っだけ質問させて」

兄が頷く。

「彼女は、あなたが結婚しようって言うのを待っていたんだと思っう？」

「そうかもしれない」

伽耶子が不安な目で兄を見る。

兄は出かけて行った。

布団に入ったけれど、眠れなかった。兄のいない夜の屋敷は、まったく同じ見かけでも、異次元のとは口に住む影のようだ。目をつむりながら、神経は玄関の戸に向いている。どんなに離れていても兄がその戸を開ける音なら聞こえる。

伽耶子にとって、兄は特別な存在だった。生まれた時からずっと。

伽耶子は、自分の持つ不可思議な能力の為、ほとんどこの屋敷を出たことがない。幼稚園は一カ月、小学校は半月で、登校出来なくなってしまう。彼女の経験値は、兄によって積み重ねられた。疑似的なものではあるが、兄の目が、伽耶子の目となって世間の日常を見つめ、雑多な人間関係を見つめている。兄の経験が、伽耶子の人生なのである。

夜中、玄関が微かに鳴った。姉が居間から出て行って、鍵を開けた。兄が帰ってきた。姉と二、三言葉を交わし、廊下を歩いてくる。伽耶子の部屋の前を通るとき、『おやすみ』と声をかけた。伽耶子は、やっと眠りにつけた。

朝、兄はいつものように黙ったまま食事をし、出勤していった。玄関から、門に向かって行く兄。後ろ姿を見送りながら、伽耶子の心は、もう帰って来る兄を待っている。また、長い一日が始まる。

もしも、これを恋と呼ぶなら、伽耶子の恋は生まれてすぐに始まり、死ぬまで続くに違いない。『もう少し大人にならないとね』姉の口からその言葉が発せられた時、伽耶子は身に被っていた卵の殻に、コツンとひびが入るのを感じた。砕かれるのを恐れながらも、その日が来ることはわかっていた。姉は正しい目を持っている。生きることに対する強さとしなやかさを秘めた目。大人たちのように、むやみに伽耶子のひ弱さを責めることもなく、時を待って、見守っていてくれた。

伽耶子は、よく思い描く。この屋敷で年老いていく自分。兄は、外の世界へと出て行く。そして家庭を持ち、時折この屋敷を訪れる。小さな息子を肩車し、その後ろには慎ましやかな妻と、おしゃべりな娘。穏やかな風景。それは、果たして自分の夢なのか、兄の願いなのか。兄が家を出られない理由が、妹を案じてのことなら、大人にならねばならない。兄を解放するた

めに。

夕暮れ、門に立つ。坂の上に兄の姿が見える。伽耶子の至福の時。毎日毎日、待っている妹。世間には奇異に見えるだろう。

この思いは、間違っている。重い重い石をつけて、心の奥底に沈めねばならない思いなのだ。

いつのまにか、後ろに姉が立っていた。

「あせることはないのよ。少しずつでいいから、お互いにもう少し距離をおかないとね。普通の人は、目に見えるものしか見えないのだから」

伽耶子の心を見抜く言葉だった。

その日は、落ち葉を集めて過ごした。明日は、日曜日。兄が一日中家にいる。

(焼芋を焼こうか?)と考えた。

この所雨が降っていないので、落ち葉はよく乾いている。

門の外に人の気配がした。振り返ると、男が門をくぐって来る。三十歳前後。

真っ直ぐ玄関に向かおうとしていたが、伽耶子の姿を見つけてこちらへ寄って来た。興奮気味だった。彼の中には、怒りに似た不安と苛立ちがある。

ここに出入りする姉の周辺の人間ではない。姉に関連した人々は、みな一様に伽耶子を無視する。姉は彼らに伽耶子と一

切接触を持たぬよう厳命している。彼らとの接触で、伽耶子がパニックに陥ったことがあるからだ。

(話しかけられる!)

そう思った途端、伽耶子の心臓は早まっていく。ゆっくりと数をかぞえて息を調えた。

「教祖様とやりに会わせてくれ!」

男はわざと乱暴に切り出した。

「教祖様?」

伽耶子は、その聞き慣れない言葉に小首を傾しげた。

「この屋敷の主人なんだろう。くだらない占いで……」

男は口籠もった。

「とにかく、会えばわかるはずだ。なんでも見通せるっていうのが売り文句のはずだろう」

「姉ですか? 姉に御用ですか?」

不意を突かれたように、男は伽耶子を見た。

「姉? 教祖様っていうのは……」

伽耶子が玄関を見た。その視線を追って男が玄関を見る。そこに、着物姿の姉が立っていた。

「お待ちしておりました」

彼女は静かに会釈した。男はもうすでに言葉もなかった。彼が、彼の父や、その周囲の人々の言ったことを信じ始めていると、伽耶子は感じた。

(教祖様を悪く言うな! お前がどう言おうとあの方には未来

がみえていらつしやるのだから)

男の頭の中に、彼の父の言葉が交錯する。男は、ずかずかと姉に近付いて行き、

「父が死んだ。自殺したんだ」

叩きつけるように事実を吐き出した。姉は、じっと男を見つめた。男は、自分が見つめられていることを意識せずにはいられない。自分を離れ、その女の目で見えた時、自分がいかに卑小に見えるかがわかる。

(これは、いいがかりなのかもしれない) と思った。

「そのようですね」

女の声は、あくまで落ち着いている。

「私のせいだとおっしゃりたいのですね」

男は返答を探していた。そして、口を開こうとした時、

「そうかも知れません」

女は自分の問いに、自分で答えた。凜とした立ち姿のまま。

そして、くるりと踵を返して玄関を奥へ入っていった。男は呆然と見送るばかりである。

やがて、優雅に振り返り、

「お話を伺いましょう、どうぞ」

と手招いた。

(ふう……)

伽耶子は、思わず溜め息をついていた。肩の力が抜ける。

自分と対極にいる姉。いつも落ち着いて堂々としている。彼女の中には、人のかしずきたくなる何かがある。そして、素通しのガラスのような兄の心とは正反対に、何一つ見せようとしていない。姉の心は、伽耶子がとりつくしまもない冴々とした月のようだ。

二人の姿が奥へ消えるのと同時に、笹原由宜が門をくぐって現れた。額の汗を拭いながら、敷石をひとつおきに大股に歩いて来る。いつもは、気障なほどにゆるやかな歩調で歩く人なのに。

「伽耶ちゃん、誰かお姉さんを尋ねて来なかった？」

伽耶子はコクンとひとつ頷いた。

「ありがとう」

彼は、最後には駆け込むように玄関に入ってしまった。

笹原由宜は、従兄弟である。祖父が外に生ませた、父の異母姉を母に持つ。今年四十歳になるはずだ。伽耶子には、柔和な笑顔だけが彼の持つ表情のような気がする。なのに、経済界では知らぬ者のないほどのやり手だ。そして、その後ろにこの家の主がいることも周知の事実なのである。父が死んだ十年前、二十歳の大学生であった姉と、笹原が手を組んで起こした事業が、大きく展開して世間の注目を浴びていた。その先見の明が語られる時、陰で姉の不可思議な能力が取沙汰されている。それを信じて人が集まる。姉の周りには、信者と呼ばれる人々がいる。

「伽耶ちゃん、お茶入れてくれたって」

笹原が戻って来て、伽耶子に声をかけた。

客に茶を入れることを頼まれたのは、初めてである。

（笹原さんでさえ、近頃はほとんど話しかけてこなかったのに……）

またひとつ、姉にトンと背を押されているような気がした。

盆に三つの湯飲みをのせて、長い廊下を歩いていった。おずおずと部屋に入ると、姉は伽耶子にもそこに座るよう促した。

笹原の目がおもしろそうに伽耶子を見る。いつもの柔和な笑顔に戻っている。笹原の足を急がせていたこの男とのトラブルは、すでにほとんど解決しているのだろう。男は完全に姉のペースにはまって見えた。

「私も私に見えているものが、本当に未来なのかどうかはわからない」

姉は、歌うようにゆつたりとしゃべり始める。

「ただ、ここに来る人はみんな、なにかしらの選択を迫られている。」

私には、それが何の選択なのか見通す能力もないし、どちらを選んだらいいかアドバイスする力もない。でも、将来その人がよりよい状況にいるか否かを感じることが出来る。それはとても漠然としたもので、その人の発するオーラから、未来を推測しているんだと思うわ」

「オーラ？　じゃあ、さつき俺を待っていたと言ったのは？」

「だって、あなた、ここへ来る前に笹原の所へ怒鳴り込んだでしょ。秘書から連絡を受けた彼が、出先から慌てて私に電話をくれたのよ」

姉は、にこやかに、あつけなく種明かしをした。

「蓋を開けてみればそんなことか！　そんなあやふやな予言を信じて、おやじは自殺しちまったのかよ！」

男の握りしめた拳が震える。

「お父様は、重要なポストにいたから、悩むことも、迷うことも多かった。何度か私のもとへみえたので、いろいろお話ししました。そして、最後にいらした時、私はなんの返事も出来なかった」

「なぜ？」

男の問いに初めて、姉が言い淀んだ。男の顔を見て、口を開きかけ、また口をつぐんだ。

「なぜ、返事が出来なかったんだ」

男が詰め寄る。

姉は、哀れむような、愛しむような、不思議な表情をみせた。

「お父様に未来がなかったから。私には何も見えなかった」

男は、ブルツと身震いした。

「もちろん、そんなことを言いはしなかったけど、お父様が何をどう感じて帰られたのか。運命は定まっていたのか、それとも……私がそこで一票を投じてしまったのか」

しんとした間があった。

姉が、庭の木々へと視線を外す。それにつられて、男も外の風景を目で追った。木漏れ日が美しい。男の心の隙に、姉の最後の言葉が突き刺さった。

「ただ、私に見えた未来は、一度も外れたことがない」

男が帰った後、笹原は畳に足を投げ出した。

「あせつたなあ。電話じゃあ、かなり頭に血の上った奴だっというから、何をしでかすかと……久しぶりにあの坂を駆け登ったよ」

「御苦労様」

姉の笑みには、控えめな艶やかさがある。

「彼は、エネルギーを持っていてるわ。今は何の仕事をしているの？」

「父親と同じ建設省だが、昨日辞表を出したらしい」

「あの人は、父親のようなスケープ・ゴートにはならない。世の中が官僚の腐敗を絞り出す方向に傾いていく。彼の選択は正しいかもしれない」

「そんなもんかな」

気のない返事をしているようだが、笹原の頭はフル回転している。ここで手に入れた情報、特に、ついていくべき人間、遠ざかった方がいい人物についての情報が、彼を時代の波に乗せて、ここまで押し上げたのだ。

「私に見えた未来は、一度も外れたことがない……か。すごい台詞だな」

笹原の正直な感想である。

「ただのはったりよ。良い未来、悪い未来。何を基準にそんなものが決まるんだか。人の幸、不幸なんて誰にも決められやしない。幸せは、不幸の次に出番を待っているのかもしれない。不幸の芽は、すでに幸せの中に息づいているのかもしれない。一体、未来のどの時点を指して、あなたには幸運が訪れるなんて言ったらいいの」

「ふうん」

今度は、随分感心している相槌だった。

「なによ、その『ふうん』は！」

「いや、我が女王様は、そんな風に思っているんだ、ってね」
笹原は、人を喰った表情で笑った。

夕方、兄が帰って来た。入れ違いで、姉は笹原といっしょに出かけて行った。『食事に出るわ』と言っておいて。出かける二人を見送ったのは、伽耶子一人である。兄は笹原を嫌っていた。目の前で、露骨な態度を取るわけではないが、なるべく顔を会わせないようにしている。笹原は従兄弟であると同時に、姉の事業のパートナーであり、愛人だった。世間が姉を笹原の愛人と呼ばず、笹原を姉の愛人と呼ぶのは、奇妙だったが、笹原自身もそれに甘んじているようなところがあった。

姉は、すべてを自分で決める。結婚したければ、自分でそう言っただろうし、笹原にも異存はなかっただろう。けれど、彼女は笹原に家庭を持つことを勧め、その一方で自分の愛人であることを望んだ。それが姉の意思である以上、兄の口を挟むところではなかった。口は挟めなくても、わだかまってはいる。笹原はそんな兄に、拗ねる子供に手をやく保護者のような態度で接する。だから、余計反発を買ってしまうのだ。姉が朝まで戻らないと思うと、それだけで兄の心はイラついた。

翌日、兄は昼まで寝ていた。伽耶子は、兄の眠る部屋のそばで、書庫から持ち出した古典の本を読んで過ごした。五十年程前に出版されたもので併記されている解説さえも、すでに難解に思われた。けれど、このゆったりとした日曜の朝に似合っている。

姉は、朝帰りの気配などまったく見せず、立ち働いている。父が生きていた頃、十人以上いた執事・運転手・女中・賄い・書生を皆辞めさせたのも姉だった。タズさんというお手伝いさん一人が住み込みのまま、働いている。人を恐れる伽耶子のせいなのだが、姉は『私はもともと、自分の世話を誰かにしてもらうなんていう傲慢なことは嫌いなよ』と言い張った。

「何を読んでるの？」

庭先から姉が、声をかけてきた。

「源氏物語の頃の本なんだけど……」

伽耶子は本を閉じて顔を上げた。

「おもしろいの。この時代の人って、自分の夢に誰かが出ると、その人は自分のことを思っているって考えるの」

「へえ、それって、片思いの子でも相手の夢を見たら、自分は思われているって思い込んでもいいっていうこと？」

伽耶子はちよつと肩をすくめて微笑んだ。

「そうよね。今の人がだったら、誰かを好きになったらその人会いたくてその人の夢をみるんだって思うでしょうね」

「そりゃね。それが普通だと思っただけ」

「私も初めはそう思っただけ……」

「初めは？ じゃあ、今はどう思うの？」

「少し、昔の人の方が正しいかもって。誰かが誰かを思う時、その思いがとて強いものだったら、その人は思う人の夢にも入っていきけるんじゃないかって……」

「まあ、源氏物語の時代じゃあ、生霊だって跋扈してたんだから……でも何でそんなこと考えてるわけ？」

姉は縁台に腰掛けた。

「なんでかしら……」

伽耶子の声は沈んでいた。

起きてきた兄は、庭で落ち葉の山と格闘している伽耶子をおもしろそうに眺めていた。やがて、二人は焚き火を始めた。肩を寄せ合って木の根元に腰掛ける。

ぼんやりと赤い火を見つめる兄から、まるで立ち昇る蜃気楼のように様々な風景が伝わってくる。空席の事務机。それは何度も何度も、いろいろな角度から、まるで写真集を繰るように見えてくる。その数だけ、兄は、森佐菜子の空いた席を見つめていたということだろう。

伽耶子は、こんなに兄を思いながらも、男女として結びつく二人を想像したことはなかった。お互いにそうした欲望が全く欠落していたからだ。兄の記憶といつも隣合わせに住んでいる彼女は処女でありながら、男として女を抱く性的な疑似体験を味わっている。そして、兄がそれを快感として受け止めることが、出来なかったのを知っている。兄はいつも、普通の男がこうであるだろうように、普通の人間というものがこうであるだろうように行動したがっていた。二十三歳の男として当然の性欲を持ちたがっていた。が、彼の中にそうしたものは湧いて来ない。

それでも、昨日、最後の夜に森佐菜子を抱いたのは、本当に一度も彼女を欲したことのない後ろめたさであり、彼女の思いの強さに答えるしかなかった。

兄の中には、苦い後悔ばかりがある。伽耶子の心は、兄が傷つくことに脅えている。

二人で木の根元に座ったまま、何時間を過ごしたことが。焚き火の臭いは、遠い遺伝子の記憶をよびさます。広い原野、乾

いた藁を焼く煙が大地を渡って行く。空には、青灰色の雲が長々と広がり、夕日の赤に照り映える。古代の人々の見た風景。彼らもゆらめく炎と、このむせつぽい臭いの中に、心地好さを感じたのだろうか。人を恋ながら。

でももう、この心地好さの中に住んではいけけないのだ。

伽耶子は体を起こした。唐突な妹の動きに兄が振り返った。二人の目が合う。

「ありがとう」

伽耶子がつぶやく。兄はその意味を測りかねて、伽耶子を見つめた。

人の心とはいったいなんだろう。幼稚園・小学校と突然子供達の集団に放り込まれた時、伽耶子はまだ幼すぎて、周囲から刃物で切りかかられたようだった。生身の感情・エゴ・残酷さが怖かった。あのままだったら、伽耶子の心は死んでいた。殻のない卵のように、鳥の形になる前にあの黄金の液体を抱えたまま、ドロドロとこぼれていったに違いない。姉が伽耶子の日常を、そして兄が伽耶子の心を守ってくれた。

落ち葉はもう燃え尽きていた。焚き火に駆け寄って、枝でかき分けると、焼け焦げた芋が出てきた。

「わあ、真っ黒！」

伽耶子が笑うと、兄も笑った。

二人で過ごしたあまりに多すぎる時間。いつもこうして、木の根元に座っていた。兄から受け取った記憶の中で、伽耶子は成長した。人の中には、大人になって感情がまあるく暖かな光を放つ人もいる。ほとんどの人が、自分の中にあるものを自分で許すことによって生きている。だとしたら他人の中にある醜悪さも、許すべきなのではないだろうか。

(もういいの)

伽耶子は、今度の中で呟いた。

(もういいから、兄さんは兄さんの道を歩いて)

伽耶子は、静かに深く兄への思いを沈澱させた。

秋は日々深まっていく。早い日の暮れ。坂道に人通りはなかった。伽耶子は豆腐を買う為に、門の所に立っていた。ラッパの音がした。通りの真ん中まで出ていった。いつものように、自転車を曳いた男の姿が見えてくる。うつむきかげんに近づいて来る男に声をかけた。

「あの……」

男が顔を上げた。

「はっ？」

いつもの真面目な顔が驚いていた。

何年もただすれ違ってきただけの少女が、そこに立っていた。それは男にとって、絵の中から抜け出て来た錯覚さえ与えた。

人間らしからぬ存在感だった。

「お豆腐をひとつ下さい」

澄んだ声が響く。

水の中から豆腐をすくって、鍋に入れる。金を受け取り、蓋を閉めて歩きだしたが、振り返らずにはいられなかった。豆腐屋は、何度も何度も振り返りながら坂を上っていった。

明彦

昼日中の電車は、のどかだ。あの通勤の満員電車とは、全く趣を異にしている。券売機の前では、母親が小さな子供を抱き上げて切符を買わせている。この時間帯でなければ、輦轡ものの光景だが、明彦は微笑ましく眺めていた。郊外に出来た大型の書店へ、書籍販売の打合せに出かけるところだった。明彦の勤める出版社は、中小から大手への階段を登りかけている。営業・販売の担当者は、このところ特に発破をかけられていた。帰りはそろそろ電車の混み始める時間だった。会社に電話を入れてみると『社に戻るより家のほうが近いだろう。直帰していいよ』と言われた。

ドアの側に立って外に目をやる。まだそこに、畑が残っている。自転車に乗った少年がその間を縫って走って行く。や

がて、風景は建売の立ち並ぶ新興住宅地に変わった。

明彦の心にはずつと、昨日の伽耶子の顔が引つ掛かっている。「ありがとう」

（あれは何だったんだろう。何を言おうとしたのだろう）

二十歳の誕生日の翌日、伽耶子は門の所に立っていなかった。「伽耶子！」

明彦は、慌てて玄関を入って行った。姉が顔を出して、明彦を見た。

「まあ、なあに？」

「いや、伽耶子、何か病気でも？」

「門に迎えに出ないだけで、あなたまでなんなの、大袈裟ね」

姉に笑われて、明彦はブイツと廊下を曲がった。

「もう、出迎えはやめなさいって、言ったのよ」

姉の言葉が、背中を追い掛けてきた。

明彦は（なぜ？）とは聞かない。毎日、兄を待って、門に立っているなんて、不自然に決まっている。世間体だって悪いだろう。今まで許していたことが、寛大過ぎるぐらいだ。むしろ自分が伽耶子に注意しなかったことが恥ずかしい。少しずつ伽耶子が離れて行く。伽耶子は明彦の心を読まないようにしている。まるで、部屋の隅につけられたテレビを、むりやり無視するように。もう、二人で肩を寄せ合いながら時を過ごすことは

ないだろう。

今まで、明彦の見聞きしたことは詳細に、伽耶子の中に写し取られていった。小・中・高・大学。学校に行かなくても、伽耶子は授業を受けていた。明彦の見た黒板、明彦の聞いた教師の声は、百パーセント伽耶子に伝わった。記憶は、一瞬に大量に流れて行く。会えない半日も、伽耶子は瞬時に取り戻す。

そして、二人は森で、時を過ごした。木が水を吸い上げる音に耳を傾け、太陽が少しずつ位置を変えていくのを眺めて。

（伽耶子は、もう、そうした時間を必要としなくなつたんだ）
その時が来たというのなら、明彦もまた、一歩が踏み出すしかなかった。

この時期、社内ですらトラブルが重なった。残業が続いた。驚くべきことに、入社以来一年半、明彦は一度も残業をしたことがなかった。当然周囲の人間達は、明彦にそれを期待しない。

たまたま、新しい上司が『残ってこれ頼むよ』と声をかけた。周りは当然、断られる場面を予想する。ところが、明彦は二つ返事で承諾した。拍子抜けするほど、あつけなく。伽耶子があの門で待っていないのに、残業を断る理由はなかった。

トラブルが無事落ち着いた後、明彦は飲みを誘われた。前川というその課長代理は、まだ二十八歳という若さだった。

他人と長時間酒を酌み交わして、言葉によるコミュニケーションを計るということを、明彦は初めて経験した。何よりの驚

きは、他人が自分をどう見ているかを知ることだった。

「いや、君の噂は聞いていたけど、なんていうか……」

「噂？」

「残業、つきあい、一切なし。特に親しい人間もないようだし……」

「何か？」

「余程の変わり者か、部下としたらとてつもなく付き合いくいだらうと……」

「何か変ですか？」

「変だろう、浮いてるし」

明彦は、返す言葉がなかった。ちゃんと九時から五時まで働き、仕事での失敗もなく、人間関係で特に揉めることもなく、自分には普通の社会生活が送れていると思っていた。

『浮いている』とは、どういうことだろう？

逆に、明彦の態度は、前川にも意外だった。この背の高い、取っ付き難い若者は、周りの人間をその目の高さから見下ろしていると思っていた。他人なんかと話をするのも面倒だという様子で。

ところが、こうして話してみると、自分が他の人間と違って見えることに戸惑っている。無口なのは、言葉を上手く操ろうとせず、自分を語ろうとしないせいで、人に悪意を抱いている訳ではないらしい。

「二十八歳で課長代理というのは、ウチの社では最年少なんだ。

で、まあ、いろいろやつかまれることも多くて……」

前川は、いつしか自分の本音をしゃべるほど心を許していた。企業戦士として、家庭を顧みず、社の期待を背負ってきた。あの意味誇りも持っているが、同じぐらいのプレッシャーやストレスもある。社内では、愚痴を零しながらも、そのことによる相手への効果を量ってしまう。今、全くの弱音を吐けるのは、明彦が出世に興味がなく、社内の噂話からも掛け離れ、人との駆け引きも知らないからであろう。

その後、二人は、社で特に親しい口をきくようになった訳ではないが、今、直帰を許してくれたように、時々便宜を図ってくれた。

明彦が乗った車両の座席は埋まっていた。二、三人、立っている。営業マン風の男、学生、子連れの主婦、老婦人等。雑多な人々。中に一人、目立つ男がいた。六十そこそこといった風貌。いや、荒れた生活が年より老けて見せているかも知れない。浮浪者といってもいいような身なりで、赤い印を入れた競輪新聞を持っている。初めは座席から滑り落ちそうな様子で、二人分のスペースを占領。だらしなく寝ていた。が、やがて目を覚まして、となりのサラリーマンに話しかけ始めた。しかし、話かけられた男は、一切返事をせず、視線を合わそうともしなかった。その無視の態度に、軽く舌打ちして、男はヨロヨロと立ち上がった。酒が入っているのか、赤く濁った目で周りを見回

す。若い女性が座っている。その前に立った。

「ホラホラ、これだよ、これ、わかる？ ホント惜しかったんだよなあ、畜生、あの田口の馬鹿タレが落ちやがってよお！」

男は競輪新聞を彼女の前に広げると、特に赤々と印の付いている箇所を指しながら、悪態をついた。競輪場の酔っぱらい同士ならかまわなかったらう。が、夕暮れ時の電車の中である。どうして男は紛れ込んでしまったのか。周りの人々も見ないふりをしながら、男を窺っている。当の本人だけが気付かない。無頓着に喋り続ける。電車が揺れるたび、のめり込みそうに若い女性に近づく。彼女は堅く膝頭を合わせた。男のズボンが足に触れると、不快そうに眉を蹙める。

明彦は、そんな風景をじつと見ていた。

女は、きちんとした装いで、キリッと顔を上げ、前を向いている。表情や視線の強さが、キャリアアウーマンっぽい雰囲気だ。席を立とうにも、薄汚い男に立ち塞がられてどうにもならないという風である。

吊革に掴まっていた一人の若者が、つかつかと近づいた。

「いいかげんにしろ！」

二十代半ばの、若者らしい正義感を見せて、女性を庇った。乗客の中に緊張が走る。男の反撃を、全員が身構えて待つ。

「嫌がつているだろう！」

若者が言い募った。乗客たちは無関心を装うのも忘れて、見入った。男は、初めてまじまじと女性の顔を見た。女の目の中

にある侮蔑の色に尻込みした。

「あ、こいつ……こいつが当たつてりやあ、おれだつて、何だつて買って、よお！」

男はしどろもどろになって、何かに言い訳している。

電車が揺れた。男は足を取られて無様に転んだ。若者にぶつかると、若者は汚いものを避けるように身を引いた。男は、やつとの様子で立ち上り、元の席に戻っていく。成り行きを見守っていた人々も、一応の決着に、無関心な、その他の人間に戻っていった。女性は若者に礼を言っている。

電車は駅に近づき、速度を緩めた。悄然と席に座る浮浪者に、一人の小柄な少女が近付いた。屈みこんで、ポケットから出したまだ封を切っていないハイライトを、男の手に握らせた。彼女の小さな手が男の手を包み込む。

「がんばって！」

彼女はそう一言言い残すと、開いたドアからサッとプラットホームへ飛び下りた。一瞬の出来事だった。

後を追おうとした明彦の目の前でドアが閉まった。彼女はプラットホームを走り、駅の階段を四、五段登りかけた所で振り返った。走り出した電車が一陣の風を送る。彼女の前髪が揺れた。ジーンズ姿の小柄な彼女は、まるで砂丘に立つ戦士のような遠い目をしていった。

明彦を乗せた電車は、駅を離れて行った。

自分の頭の隅にあったチリチリとしたものの意味を明彦は悟

った。老いた者、欠けた者、醜い者に対して、人はどうしてあの様な酷薄さを見せるのだろうか。おずおずと人間社会に居場所を求める異端者を、その輪の外へと突き飛ばす視線。充分な正しさや美しさや若さを持った人々の全きな視線に、明彦はいつもイラついていた。それは裏返せば、世の中に適応していきたくない、受け入れられたいという渴望の現れであつたかもしれない。

家に着くと、門を入ろうとする伽耶子の姿があつた。手に持った片手鍋に豆腐が入っている。

(もし、あの電車に伽耶子が乗っていたらどうしただろう)

自分だけが、この妹に寄り添える存在だと自惚れていた。他人の心は彼女を傷つける。自分だけが妹を傷つけない、守ることの出来る存在だと思つていた。そう信じるのが、自分自身にとつて必要だつた。

妹を守るという名目で自分を誤魔化している。自分の方こそ、手探りで普通の生活をしようとかあがいているのに。だから、人の中から浮き立つことを恐れている。息を凝らして暮している。外界との違和感は、妹のせいではない。自分の中にこそある。ただ、認めたくないだけだ。

「ただいま」

と声をかけると、黒目がちの瞳が振り返つた。

明彦は伽耶子の目の中に、今の出来事が反芻される瞬間を見

ていた。妹は、今、彼の出会つた少女を知つた。少女の行動をどう思うのだろうか、この最も人間たちの輪から弾き出されている妹は。

(僕の半身のような妹。でも、本当は僕に依存しているわけじゃない。真の姿を育てる為に、じつと殻を被っているだけだ。伽耶子の深い心の形、芯にある美しさ。いつか彼女は脱皮して、本当の伴侶と共に飛び立つて行くのだろうか？ 僕をおいて、いつか……)

翌日、書店の開店祝いに出かけるはずだつた課長代理が、所用で社を離れられなくなつた『僕が行きます』と名乗り出たのは明彦だつた。今まで仕事において、積極的な所の微塵もなかつた明彦のこの行動に、同僚たちは首を傾げた。

帰り、明彦はあの駅で降りてみた。少女の駆け登つて行つた階段を見上げた。そのまま、どのくらいそこに立つていただろう。自分の馬鹿らしさが腹立だしくなつてきた。

(一体何をしてるんだ)

電車に乗ろうとした。でも、乗らなかつた。

(こつちが一方的に彼女を見ていただけで、彼女は僕のことを知らない。会えたつて、何をどう話しかけたらいいんだ)

プラットホームのベンチに座つた。

(大体もう二度と会えないかもしれない。たまたま何かの事情

でこの駅に下りただけで、彼女の生活圏は全く違う所かもしれない」

ふと、森佐菜子とよく偶然に出会ったことを思い出した。偶然ではなかったのかもしれない。自分は気付きもしなかった。彼女の思いをついに受け止めることのなかった罪深さ。

その翌日も、明彦は結局会社の帰り、遠回りをしてその駅に下り立った。改札を通って町へ出てみた。見知らぬ町。何度もしその駅を通過しながらも、一生下り立つことのなかったかもしれない町。

郊外の、思いの外大きく発展している町中を一人歩いてみた。ファーストフードの店、小さな花屋、洒落たケーキ屋、その間に古ぼけたクリーニング店や三味線屋が挟まれ、活気のある惣菜店が続く。大きな駅ビルを背景に小さな店が広がっている。あてもなく歩き回り、あてもなく駅に戻った。切符を買って、改札へ歩き出した時、明彦は彼女を見た。

小柄な少女は軽々とこちらへ歩いて来る。ブラブラと周りを眺めながら、目にかかる髪を細い指で掻き上げる。彼女の視線が明彦を捕らえた。瞳に驚きが広がる。明彦の耳から、雑踏のざわめきが遠のいた。二人は言葉もなく立ち尽くした。

「君を探してた」

明彦が、どうにか言葉を見つけた。

公園のベンチに座って、会話を始めるまでに、どれほどの時間のかかったことか。

一昨日、電車で彼女を見たことを話した。

「あそこにいたの？」

意外そうな表情をする。

「ホームの階段を上りかけて振り返ったね」

「誰かに呼ばれたような気がして……」

彼女の声は、ハスキーで甘い。

明彦は、二人の会話の辻褃の合わなさを気にしなかった。知り合ってしまったら、知り合う前のことは、どうでもいいような気がした。出会った時、なぜ彼女は明彦を見て驚いたのか？ そんな疑問も、すぐに忘れた。

二人は中学生の恋人同士のように、離れ難さを感じていた。送って行くと言うと彼女は断った。そのくせ『さよなら』を言えず、時が過ぎて行く。結局、アパートまで送った。駅から十数分の距離を一時間かけて歩いた。

翌日も、会った。彼女は京子と名乗った。少しだけ自分の話をして、大半は、明彦のことを知っていた。何もかも知っていた。妹のことも、姉のことも、好きな食べ物、好きな音楽。明彦は問われるままに何でも話した。

明彦の性格の話になると、京子はケラケラと笑った。

「目がいけないのかもよ。すごくエラソーって感じ」

「偉そうかな？」

「周りのことはみんな、下界の出来事って目してる」

京子は会って二日目だというのに、明彦に対して不思議な理解を示した。

（言われてみると思い当たる気がする。森の外にいる時、周囲の事は、遠くにあつて、気にもならないし、関心が持てない。弾き出されていると思つていたのは、自分が背を向けていたということなのだろうか）

「中学、高校と入学二日目には、殴られていたよ。何だか訳のわからない上級生に」

「人に突つかかられやすいのね。その背の高さだけでも目立つけど」

京子は、明彦をじつと見た。

（何が彼をこんなにも他の人から際立たせてしまうのだろうか）

葉子

弟の様子がいつもと違うことには、すぐ気付いた。伽耶子と明彦の関係が微妙にバランスを崩している。伽耶子が二十歳になって、大人になるための一歩を踏み出した、それはいいことだ。そして、明彦が自分の時間を持つ、それもいいことだと思う。

でも、それとは別の何かが、弟に起こっている。

食事の時、開店する書店の話をしてくれた。仕事の話などしたこともないのに。明彦を饒舌にしている何かがある。そのことを言おうとして、話はその周りをグルグルまわる。

（女性？）

翌日、帰りがいつもより遅かった。このところ仕事で残業することはあつたけれど、必ず電話が入った。十時過ぎに戻った弟は、人に会つていたのだと言葉を濁したが、高揚した気持ちは隠せずにいた。

そして今日もまた、十時になろうとするのに帰つて来ない。連絡もない。未婚の二十三歳の男。こんなことは、馬鹿らしいくらいに当たり前。葉子自身、明彦にはそのくらいのことが必要だと思つていた。なのに、この不安はなんだろう。

明彦は大学を卒業する時、葉子の仕事を手伝うと言つた。父を亡くしてからずっと、一家の大黒柱となつて姉の負担を、少しでも軽減しようという弟の気持ちは嬉しかった。けれど、葉子は断つた。ベンチャービジネスとして躍進する企業のハードさが、明彦に太刀打ち出来るようなものではないと思つた。

中小の企業に勤めてその歯車となり、自分や妹から離れた所に独立した穏やかな家庭を持つ。それが弟の望みかもしれないと感じた。

妹は初めからこの森を出ること、人々の中で暮らすことを望んでいない。けれど弟は違う。市井に埋もれた生活に執着している。普通に暮らすという幻想に囚われている。そして、明彦

が普通に暮らして行きたいのなら、伽耶子とは離れるべきだと思う。

森佐菜子という女性と、なぜうまくいかなかったのか。別に取り立てて意味はないのかもしれない。今また、明彦の変化が新しい恋の始まりなら、それでいいのではないか。

十一時を過ぎても明彦は帰らない。

(寝てしまった方が、明彦も気兼ねじゃなくていいかしら)

葉子は眠れないことはわかっていたが、布団を敷いて家の中の電気を消し始めた。伽耶子はいつもの時間に部屋へ戻り、電気も消えていた。眠っていないことはわかっている。よく我慢していると不憫に思う。

十一時二十分頃、門の前で車の止まる音がした。少し待ったが、玄関は鳴らない。葉子は、胸騒ぎを覚えて外に出てみた。タクシーのドアが開いて、明彦が立っていた。

「大丈夫だから」

ルームランプに浮かぶ、中の女性に話しかけている。

歩き出そうとすると、体が揺れてよろけた。

「すぐ戻るから、待ってて」

女性はすばやい身のこなしで、タクシーから降りると明彦の体を支えた。

「大丈夫だよ」

「大丈夫、大丈夫ってそればかり。そんな時は気が張ってるから大したことなくても、後からひどくなることだってあるんだ

から！」

怒った口調が真剣に明彦の身を案じていた。

「明彦」

葉子が声をかけると、二人とも振り向いた。

「お姉さん？」

女というより、まだ少女のあどけなさで明彦に尋ねる。明彦が頷くと、ペコリと頭を下げて挨拶した。

「こんばんは」

それはちよつと間の抜けた挨拶だった。

「どうしたの？」

葉子の問いに、二人は同時に口を開こうとして、また二人いっしょに黙った。

「こちらは？」

葉子の問いに

「京子さんて言うんだ。あの…：帰る途中、車に引っかけられちゃって」

明彦は上着の破れ目を指さした。血の滲んだシャツがその下に見える。引っ掛けられたというような軽いものではない気がした。

「心配して送ってくれたんだ」

「引っかけた車はどうしたの？ 救急車を呼ぶなり、病院に行くなりしなくちゃ」

「たいしたことないから」

「車はそのまま行ってしまった……」

京子の語尾は、曖昧に消えた。

「お客さん！」

タクシーの運転手が迷惑そうに声をかけた。

「じゃあ、大丈夫だから君は帰った方がいい」

明彦は京子を促した。京子はもう一度葉子に向かって頭を下げると、タクシーに乗り込んだ。

車の去った後、静まり返った深夜の路上を振り返ると、門の所に伽耶子が立っていた。

「伽耶子」

明彦の声を振り切るように、彼女は家の中へと駆け込んで行ってしまった。

朝食の時、伽耶子は部屋に引き籠もったままだった。葉子は明彦に詳しい話を聞きたかったが、彼の疲れた様子を見ると問い詰める気にはなれなかった。『病院へ行ったら?』と言う葉子に『軽い捻挫だから』と取り合おうとしない。

「伽耶子のことは心配しなくていいわ。私がちゃんと話をきいておくから、平気。伽耶子は馬鹿な子じゃないもの。いろんなことわかった子よ」

明彦は頷いた。俯くと睫毛が陰を落として、意外なほど端正な顔立ちに見える。何かを言おうとして、何も言わなかった。

明彦が出動した後、葉子は伽耶子の様子を見に行った。部屋

にはいなかった。庭の木々の向こうに大きな池がある。その岸に伽耶子の姿を見つけた。泣いた目をしていて。眠っていないのだと思った。

「明彦に新しい恋人が出来たこと、ショックだった？」

葉子は言ってしまったから、自分の単刀直入さに呆れた。仕事の場とは訳が違う。二十歳の少女が一晚泣き明かしているのに。伽耶子は力なく首を振った。

「兄さん、京子さんと出会ってから、ずっと京子さんのこと考えてた。いくら私が心の目をつぶっても、兄さんの頭の中は京子さんのことばっかりで、気がつくとも私も京子さんを見ていた」

「前の時、森佐菜子さんの時とは違う？」

「わからない」

「本当の恋をみつけたのかな？」

「兄さんもわかってない。ただ彼女といっしょにいたいだけ」
葉子は大きな石に腰掛けた。わざと明るく話しかけてみる。

「いいじゃない、それで、いいのよね」

伽耶子も頷いた。風が水面に枯れ葉を落とす。水に広がる波纹を見つめながら、伽耶子は話し始めた。

「姉さん、私って兄さんにとって、吸血鬼みたいなもんだったのかな」

「何よ、それ……」

「吸血鬼は血を吸って生きてるけど、私は兄さんの記憶を糧に

大人になった。兄さんに何も影響してないはずだよね。兄さんこんな所に捕まって、こんな妹に捕まって、迷惑だったよね」

葉子は、うまく返事を見つけられなかった。

「もしかしたら、森佐菜子さんの事だつてどこかで私が邪魔してたのかもしれない。光源氏の恋人を取り殺した生霊のように」

この間の伽耶子との会話を思い出した。夢の解釈のことだった。昔の人は、思いが眠っている人の夢の中に割り込んでいくと考えた、思いが人を捕らえるのだと言っていた。

「姉さんがいてくれるから、生まれた時からずっと側にいてくれて、たくさんのお話を一人で支えてくれて……だから、頑張れると思った。兄さんと距離を置いて、兄さんを私やこの家から解放してあげたいって」

「出来てるじゃない。ちゃんと出来てるわ。だから、明彦は新しい恋を見つけたのよ」

「そうかな」

伽耶子は弱々しく笑った。今にも泣き出しそうな顔だ。

葉子はその髪を撫でた。伽耶子の心を宥めるように、そおつと。静まり返つたこの庭では、二人の息づかいさえも密やかである。

静寂。

違和感を覚えた。

伽耶子の目を見た。何かに怯えている。

(明彦の恋が祝福されるものであるのなら、どうして伽耶子が

不安を抱くのだろうか?)

「ゆっくり聞くから、心に引つ掛かることがあるなら話して」

「姉さんの言うとおりだと思う。兄さんは、本当に京子さんのことを好きになつて……」

(いつも明彦のことを一番に考えていたのは誰? きつとあなたの今感じていることは正しい)

「違うの。私の言葉じゃなくて、あなたの言葉で話して……何が恐いの?」

伽耶子は首を振る。

「わたし本当に邪魔しない。応援したいと思つて!」

伽耶子の話は、核心の周りを堂々巡りする。

葉子は、決して急かさない。何も言わず、伽耶子を見つめている。

観念して、それでも言葉を選びながら、伽耶子は自分の見たものを、ポツリポツリと話し始めた。

「初めは兄さんの高揚した気持ちに伝わって来て、私もこれでいいんだつて納得してた。兄さんの恋が実るか実らないかは、兄さんと京子さんの問題で、私はここで成り行きを見守るだけの存在なんだつて」

葉子は相槌も打たず、辛抱強く耳を傾けた。

「でも、昨日京子さんを見た時……」

「……」

「違つて感じた。私の知つてる京子さんじゃない。兄さんの

中に見ていた京子さんじゃない」

「どういうこと？」

「わからない。兄さんに見えたものが、私に伝わってくるはずなのに、あの人は違った」

「どう違うの？」

「言葉ではうまく説明出来ない。兄さんの目に映っている京子さんと、実際の京子さんは違う人なの」

「何を言っているの？ うそをついているということ」

「そういうことじゃない。そういうことじゃないけど……」

伽耶子は、自分の中にある何かを絞りだそうとするように、体を硬直させていた。

「でも、そう、ひとつだけ、ひとつだけ確かなうそが見えた」

「うそ？」

「兄さんを轢き殺そうとした車……運転していた男の人、見たの、見えたの、京子さんの知っている人だった」

「誰？」

葉子の声が緊張した。

「京子さんが知っていると感じた、そこまでしかわからない」

そう言っただけで俯いてしまった伽耶子は、次の瞬間、激しく頭を振った。

「違う、違う！ うそ！」

葉子は慌てて伽耶子の両腕を包んで自分の体に引き寄せた。

伽耶子のか細い肩が震えている。

「姉さん、私に見えてるものって、本当は何？」

伽耶子の訴えは続く。

「私、たくさんの人の心を見てきた。真実が何かなんて関係ない。人は自分さえ欺いて信じ込める。人の心の奥深い所には、その人自身さえ気付かないものが潜んでる。」

「京子さんは、確かに運転手を知っていたのね」

「そう感じた……、でも恐い。私がまた兄さんの幸せを壊す。

私がうそをついているのかもしれない。何か間違えを犯そうとしてるのかもしれない。京子さんを兄さんから遠ざけようとして、兄さんを取り戻したくて、そんなものが見えたのかもしれない。自信がないの。何もかもあやふやで、一晩中、シーソーに乗っているように、気持ち揺れていた。私が見たものは、どうして兄さんの目が見たものと違うの？」

「ねえ、伽耶子落ち着いて」

葉子の声が、ゆっくり伽耶子の耳に入ってくる。

「一番大事なことを考えなくちゃ」

「兄さんのこと？」

「明彦に危害を加える人間がいるかもしれないってこと。もつと自分に自信を持って。あなたは明彦の為にならないことはないわ。生霊になんかなったりしない。明彦が京子さんに恋して真実が見えてないなら、私たちが真実を見つけて、明彦を守らなくちゃならないのよ」

葉子の言葉が、伽耶子の心に届く。聞き慣れた深い声、落ち

着いた語尾。人を信頼させる姉の中にある何かが伽耶子を導く。「自分に自信を持つ……私は兄さんの為にならないこととはしない……」

伽耶子は葉子の言葉を繰り返した。

京子

(この角を曲がると駅のロータリーが見える)

伽耶子は兄の記憶を反芻しながら、精一杯躊躇のない足取りで歩く努力をしていた。切符を買い、駅の改札を通った。ちゃんと初めてのようにではなく出来たと思う。こんなにも兄の記憶が自分の血肉となっていることに驚いた。そして、幼かった日の失敗に怖じ気づいていた自分を、ちゃんと成長させてくれていた『時』に感謝した。

実際に今見ている風景と、記憶の風景の誤差は、きっと視線の違いだ。明彦の背の高さは、伽耶子の目の位置からとは、違った風に世界を見渡す。

明彦のクリアな視野。その恩恵を誰よりも知っているのは伽耶子である。伽耶子は明彦のように鮮明な記憶を持つ人間を他に知らない。いや、一人……あれはいつのことだったろう。

伽耶子がまだ普通の子と違うことに気付かれていなかった

頃。小さな彼女が庭先にしゃがみこんで、椿の花に見惚れていると、頭髮も髭も真っ白な紳士が隣りに、いっしょになつて座り込んだり、椿を見つめていた。やがてその人は、玄關の方から父に呼ばれて立ち上がると、伽耶子の頭に手を置き、「また、いっしょに眺めよう」と言った。その瞬間、伽耶子の頭の中に、幾百枚もの写真が流れ込んで来た。

普通、記憶というものはとてもあやふやで、例えば、着ていた服、髪型、メガネの有無、思い出そうとしても驚く程いいかげんなイメージしか浮かばない。あるいは、手に持っていたもの、風景。全体はぼやけていて思い出そうとする部分に焦点を合わせて初めて細かい部分が見えてくる。逆にどこかにピントを合わせて記憶されたものは、それ以外の部分は、全く白紙だったりする。ところが、その老紳士はそれこそ佇む婦人の後ろにある時計の針の位置まで、あるいは密生する樹の枝ぶりまで鮮明に……まるで写真に撮ったように覚えていた。そこには、自分自身の目という実際に存在する器官を乗り越えてしまったような客観性がある。明彦の視野と同じだった。

その老紳士が、非常に高名な画家であると知ったのは随分成長してからである。

彼のクリアな視野、天賦の才は、絵というものに出会って開花した。では、兄のそれは何の為のものなのだろう。自分がこうして無造作に利用していいものとは思えない。

伽耶子は、あの晩明彦が立ったのと同じ位置に立って京子の住むアパートを見た。明彦は、京子と再会した日、彼女を送ってここに佇んでいた。小柄な後ろ姿が何度も彼を振り返りながらドアに着き、部屋に電気が灯った。窓が開いて彼女が手を振り返して行った。明彦自身が自分達のそんな幼い行為を恥ずかしながら、伽耶子は人も動物も皆、そうして異性を求めるのだと妙に納得していた。自分の恋にはない、その幼さを愛しく感じていた。

(それなのに……)

自分は今、京子という女性を疑い、彼女を調べる為にここに來ている。

伽耶子は一步を踏み出した。兄の記憶の枠はここまでだ。ここから先は、伽耶子自身が自分の目で確かめなくてはならない。部屋の前にかかっていたネームプレートは『坂崎』外には、生活を感じさせるような物は一つ置かれていない。取り澄ました扉が静まり返っている。ノックを試みたが、当然のように返事はない。そろそろ日は沈もうとしているけれど、それでも勤めている人が帰るには早過ぎる時間だ。伽耶子は待つつもりだった。

つるべ落としにあたりが暗くなってしまうと、少し肌寒くなってきた。軽い足音が階段を駆け上がって来る。髪を耳の上で二つに結わいた二年生ぐらいの女の子がランドセルを背負って

走って来た。伽耶子を気にしながらポケットから出した鍵でドアを開けると、隣の部屋に入ってしまった。が、すぐに又ドアが開いて好奇心に満ちたくるくるとした丸い目が外を覗いた。

伽耶子と目が合うと、すぐに引込んで戸を閉める。それでもドアの向こうでこちらを伺う気配が伝わって来る。京子のことを知っている伽耶子は直観した。伽耶子は思い切って戸を叩いてみた。しばらく間があつて戸が開いた。心臓の鼓動がドクドクと頭に響いて来るようだった。これは自分の緊張。そして、この少女もまた、緊張している。話を聞き出すには、この緊張を解かねばならない。

「兄が……兄が、隣の坂崎さんとききあつていて……」

伽耶子には、相手が大人でも子供でも同じだった。

「それで、坂崎さんの話を伺いたくて……」

少女は小首を傾げた。戸口の前の女性は、子どもである自分にまるで大人同士のように話しかける。大人でありながら自分以上に緊張している。少女の緊張が解けた。心が開かれた。妙な感覚だった。少女の心が緩むと一瞬にしてたくさんの情報が流れ込んで来る。大人のように抽象的な概念がない分、全てがストレートな記憶だった。様々なモザイクを寄せ集めた場面が少女の中に詰まっている。伽耶子が兄以外の誰かに対して、偶然ではなく故意にその記憶を受け取ったのは初めてのことである。

「純子」と彼女の名を呼ぶ母。小学校の教室の風景。年の離れ

た姉の顔。新聞を読む父。京子の姿もある。

パタ。パタと記憶の旗が振られて、少女の目で見た風景を伽耶子の視線が追って行く。純子の日常とこれまででの人生。

彼女は学校でいじめられていた。嫌がらせや無視の中にいた。『ビンボー』とはやしたてられたこともある。気の弱い笑顔や嫌がらせに対して戸惑う純子の姿が周りを付け上、がらせる。もう成人して家を出ている二人の姉。共働きの親。純子は可愛がられて育って来た。が、小学生の親としては、年を取り過ぎてしまつて彼女の母は、娘の身に起こっていることに気付かなかつた。純子は、子供達の理不尽な無頓着さの中で生活している。

「お隣りのシンデレラ」

純子の記憶にある、京子の口からこぼれた言葉を、伽耶子は真似てみた。キョトンとした純子の目が伽耶子を見つめる。

「純子のこと話してた？」

伽耶子は意味を測りかねて、答えそびれた。

「お隣りのお姉ちゃんがね、言ったんだ。純子ちゃんはシンデレラだねって」

伽耶子は、純子の中にその時の情景を見た。教室に貼つてあった純子の絵。ただ一人、賞を取つて、家族みんなで祝つてくれた。それが破られていた。結局、誰がやったのかは、わからなかつた。悪意が恐かつた。この絵は、自分を憎んだ誰かの手が引き裂いた。そう思うと、その悪意が恐かつた。そのことを共に怒ってくれる正義もない。このクラスに味方はいないのだ

という絶望的な思いが純子を捕らえていた。

京子は階段に座り込んでいる純子の様子がいつもと違うことに気付いた。辛抱強くその隣りに座つて話に耳を傾けた。ポツリポツリと語る純子の言葉に涙ぐみそうにさえなつている。純子の記憶に、純子の話を哀しんでくれる京子の表情が染み込んでいた。

「ねえ、純子ちゃん。こうは考えられないかな。純子ちゃんはシンデレラ姫なの。今、純子ちゃんの周りには意地悪なママ母やお義姉さん達がいっぱいいるけど、いつか、ちゃんと幸せになれるから大丈夫って！」

純子は強く首を横に振つた。京子は、困つたような曖昧な表情になる。

(そんな風に思えっこない)

純子はそう言いたかつた。隣りのお姉さんは、

「そうだよね、そんな風に思えっこないよね」

そう言つて

「ごめんね」

と謝つてくれた。

純子にとって、いじめは日々の試練だった。心が傷つくのが辛い。傷ついている自分を感じるのが辛い。お隣りのお姉さんに、そんな簡単な思いつきで解決すると思われたことにまた傷ついた。

それなのに、教室で辛い時、純子は何度もその言葉を思い出

した。それは、いつしか夢見がちな少女の心に寄り添って、彼女の毎日を助けてくれた。

（純子ちゃんは、シンデレラ姫なの。いつか、ちゃんと幸せになれるから大丈夫）

「純子ちゃん！」

階段の下から声が聞こえた。伽耶子は現実引き戻された。

純子は走って行って、階段を覗き込んだ。

「加奈ちゃん、どうしたの？」

「これ、忘れたでしょ」

加奈ちゃんと呼ばれた少女は階段を駆け上がって来て、純子に三十センチのものさしを渡した。

「ありがとう」

純子は受け取りながら、礼を言った。

「クラスの子？」

伽耶子の問いに純子は頷いた。

「加奈ちゃんとは学童もいっしょなの？」

「学童？」

伽耶子は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「学校が終わった後、親の働いている子を預かってくれるところ」加奈という子が説明してくれた。声の中にいろいろな情報がある。頭の良い子だ。きつい目をしている。そして……絵を破いたのはこの子だ。

伽耶子は、加奈という少女の暗部に触れる思いがした。あれから一カ月、この子は悩んできた。優等生である自分がやつたと知られることを恐れている。いじめられっ子のいつもオドオドしている純子が、自分よりも優れた絵を描いたことに嫉妬した。

「じゃあね」

加奈はくるりと背を向けて走り去った。伽耶子は手すりから、下を見た。赤いランドセルを背負った後ろ姿が走って行く。

「ねえ、加奈ちゃん」

伽耶子思い切って声をかけた。

「絵のこと、謝った方がいいよ」

ピタリと足が止まった。そして、クルリと振り向く。純子も手すりから彼女を見下ろしている。二人の目があつた。

「ごめんね」

しばらくの沈黙の後、意外な程すんなりと加奈の口からその言葉が出た。

「うん……何のこと？」

もちろん、純子は、伽耶子の言葉の意味も、それを加奈が認めたのだということも、咄嗟にわかった。けれど、突然の真実に心臓の鼓動があまりに跳ね上がってしまった。

「絵のこと」

「うくん、もう忘れちゃったよ」

とぼけることしかできなかった。

「忘れちゃった？ ふうん、でも、ごめんね」
加奈も、ちゃんと純子に庇われたことを感じていた。

子供はこうして成長していく。
(まだ遅すぎはしない)

伽耶子は、自分自身に言い聞かせていた。強い心が欲しかった。

「良かったね」

伽耶子が話しかけると、純子はコクンと頷いた。

「ありがとう」

笑顔が、パッと咲いた。

「あのね……」

伽耶子が言葉を探していると、

「お隣りのお姉ちゃんのこと知りたいんだよね」

「うん」

「どんなこと？ あたしは、頼子お姉ちゃんのこと大好きだよ」

「えっ？ 隣りのお姉ちゃんて京子さんて言うんでしょ」

「うううん、頼子お姉ちゃんだよ」

伽耶子は、純子の心に浮かんでいるのが、京子であるのを見ている。明彦の出会った京子である。

京子の家の沿線に、新しい得意先が入った。

昨日『六時にあの公園で』と京子が言った。明彦が『ちよっ

と間に合わないかな』と言うと『待つてるから』との返事だった。

以前の明彦なら一度も出向かずに済ましていただろうに。午後からその得意先に挨拶に出かけ、六時前には約束の公園に着きそうだった。

まだ足が痛む。昨夜の伽耶子のことが心に引つ掛かっている。京子のこととはわかっていたはず。伽耶子はすべてを知って受け入れてくれる存在である。びろうな話だが、いくら気取ってもトイレに入るの一人だ。が、それさえも記憶の壁はなく、セックスも何もかもが、伽耶子には筒抜けになっている。この状態があまりにはじまりからの事なので、それを隠そうという気もなかった。

電車で揺られながら、取り留めもない思いが頭に浮かぶ。電車が駅に止まった。窓から外の風景を見ていた明彦は、カチリと心に引つ掛かる何かを感じた。慌ててホームへ飛び降りる。少し戻って、その心に引つ掛かったものの前で立ち止まった。それはごくありふれた駅のプラットホームに並ぶ看板だった。

『本多病院』

黒々と大きく書かれている。あまりにもシンプルな文字の下には、精神科・神経科・内科とあった。明彦は京子がバッグにその病院名の書かれた薬袋を入れるのを見たことがある。彼女の住まいから三つ離れた駅。おそらく、この病院のものに間違いないだろう。

ただの風邪かもしれない。どうしてその場ですぐに『どこか具合が悪いの?』と尋ねなかったのだろうか、と後悔していた。その上、こんな所でそれに気付いて、電車を降りてしまった。

次の電車を待つてホームのベンチに座った。各駅しか止まらない小さな駅で、乗降客も少なく、今降りた乗客達が去ってしまったと、ポツリと取り残されたような感じだった。カップルが何かしやべりながら階段を降りて来る。女性の方に目をやった時、明彦は思わず立ち上がりそうになった。それは、京子だった。いや、いつもの彼女より少し大人びた感じに見えた。着ているもののせいかもしれない。ダークグレーのスーツを着こなし、薄く化粧もしていて、明彦の知っている京子とは別人のようだった。

そして、傍らには親しげに寄り添う男がいた。二十五、六才といった感じで、落ち着いた清潔感のある風貌をしている。二人はスツと彼の前を通り過ぎて行った。明彦を全くの通行人としてしか感じていない態度だった。

二人はそこに滑り込んで来た電車で去って行った。

伽耶子は『帰ろうか?』と思い迷いながら階段を降りていた。アパートの住人達が帰宅して来ている。通路に立っているのは何か憚られた。純子の母親が帰って来て、純子も部屋に入ってしまった。その時口にした言葉も気になった。

「お兄さんが坂崎さんと……ああ、本多病院の方ですか?」

「いえ……はい」

伽耶子は曖昧に返事を誤魔化した。どう答えたらいいのかよくわからなかった。幸い純子の母親はそれ以上尋ねるでもなく、会釈して部屋に入って行った。

歩き出して時計を見ると五時四十分だった。そして顔を上げた時、通りを歩いて来る京子の姿が目に入った。彼女を待つていたのは伽耶子ばかりではなかったようで、アパートの出入口の陰から一人の男が、京子に近付いて行って話しかけた。

「はい、どうもお世話になってます」

京子は丁寧な口調で挨拶を返す。

「盗難車が発見されて、お父さんの指紋が出たっていうんで警察の方から問い合わせがあつてねえ」

「そうですか」

「まあ、あんただだってそんなこと言われたつて困るだろうけど、私も保護司として手助けしたい気持ちはあるんで、とにかく何か連絡があつたら、こっちの方にも伝えて下さい」

「はい」

京子の表情は青ざめていた。それに気付いてか男の声は優しくなっている。

「苦勞なことだよ。でもお父さんはお父さん、あんたはあんただよ。しつかり暮らしているんだから、それでいいんじゃないのかな」

こちらに背を向けていて男の表情は読み取れないが、京子に

対する同情は伝わって来た。

男と別れて京子がこちらへ歩いて来る。伽耶子の足は止まったまま動かなくなっていた。ダークグレーのスーツに身を包んだ京子は何のためらいもなく、伽耶子とすれ違った。京子が伽耶子の横を通った時、手いっぱい張った伽耶子の琴線に京子の心が触れた。

広い日本家屋のイメージが過る。畳間が幾部屋も続く。パタンパタンと襖を開け放って行くと、奥に子供達が車座に座っていた。五人の少女はお手玉に興じている。だのに、何の声もない。目だけが片時も外れずお手玉を追っている。五人の十の目が一心に、宙を舞い畳に落ちるお手玉を追っている。五人はお手玉を囲んで外に背を向ける。頑な背を向けている。

伽耶子はその顔を確かめようと、座の真ん中に割り込んで行った。それはどれも京子だった。ハツとしてよく見ると、五人はそれぞれ年も恰好もバラバラの五人になっていた。

呪縛が解ける。伽耶子の琴線は千切れて、京子は通り過ぎて行く。振り返った伽耶子の目に、真っ直ぐアパートに向かって歩いて行く京子の後ろ姿が映った。

明彦は、結局待ち合わせの公園に来ていた。なぜ、京子は自分を無視して行ったのだろう。気付かなかったのか？ いや、そんなことのあるはずがない。他の男といっしょだったからだとしたら、京子は男に明彦の存在を知られたくなかった、とい

うことになる。明彦の考えはそこで立ち止まった。なぜ知られなくなかったのか。その答えは欲しくなかった。

出会ったのはわずか四日前のことに過ぎない。言葉を交わしたのは一昨日だ。どうしてこんなにも急速に彼女が自分の中に住み着いてしまったのか。

(サッサと立ち上がったって帰るんだ！)

自分を叱咤してみた。そう言い聞かせても立ち上がるの出来ない自分がいた。

「ごめんさい。ちゃんと六時に来れたんだ」

Gパン姿で現れたのは、紛れもなく京子だった。屈託ない笑顔を見せる。いつもの京子だった。明彦は腹立だしかった。京子が腕時計を見る。六時十分。

「ごめんね。遅れたから、怒ってるの？」

京子が覗き込んで来る。明彦は目を合わせないように横を向いた。

「そんなことないよ」

思い悩んでいた自分に比して、京子の明るさが悔しかった。

「じゃあ、なに怒ってるの？」

「怒ってなんかないさ」

「怒ってるじゃない。じゃあ、笑ってみてよ」

自分にはない京子の率直さ。それに魅かれたはずなのに、今は頑なになってしまふ。

(はつきりと聞いてみたら、難なく解決するのかもしれない)

けれど、正面切って尋ねる勇氣は湧いて来なかった。

「やっぱり怒ってる！」

京子の手が肩にかかろうとした。明彦は彼独特の敏捷な身のこなしでそれをかわしてしまった。

「何よ！ ちゃんと説明してくれなきゃわかんないでしょ」

明彦の腕を取って自分の方に向かせようとする。

「放せよ」

明彦がそれを振り払った。

「あっ！」

小さく声を上げて、京子は前のめりに転んだ。転んだ京子より、明彦の方が慌てていた。彼女の腕を取って起き上がらせようとするが、今度は京子の方が強情を張る。その手を払ったまま座り込んでいる。

「ごめん」

顔を見上げた京子は、明彦の表情の真剣さに気付いた。彼の出した手に、自分の手を乗せて素直に立ち上がった。明彦は京子の手についた血を見た。

「ちよつと切ったみたい」

京子が言う。

「ごめん」

明彦はその言葉を繰り返す。

「大丈夫よ」

「ごめん」

「大丈夫だって……」

「ごめん。ごめん」

うわごとのように謝り続ける明彦をベンチに座らせた。

「どうしたの、今日は変よ」

明彦は京子の手を取って、手の平の小さく切れた傷を見た。

「ごめん」

「心配しすぎだわ。こんな傷、ちよちよいつと舐めとけば治っちゃう」

明彦は両手を額に当てて俯いた。長い指に髪が絡みつく。

「ごめん。何だか自分でもわからない。突然恐くなったんだ」

「何が？」

「君を傷つけるんじゃないかと思って」

「これ？」

京子がおどけて手の平を明彦の目の前に差し出す。けれど明彦は俯いたままだ。

京子はその手でそつと、明彦の髪に触れた。彼を愛しむように、哀しむように。その柔らかな髪の毛の感触。

「何を怖がることがあるの？」

「何が怖いんだろう」

「あなたはこんなに大きくて、強いのに。ほら、ライオンのたてがみみたい……」

梳いた髪が指から零れる。京子は明彦の後ろに回り、その肩に腕を絡めて抱き締めた。

「白いライオンのお話があるの」

京子の声は夢見るように流れる。

「誰も傷つけない白いライオンがいるの。広い広い草原で草を食みながら一人で暮らしていてね、狩りをして鹿やシマウマを食べるライオン達からは仲間外れにされ、といってそのツメやキバを恐れて他の小動物達も寄って来ない。

ある日、その白いライオンが歩いていと川にマントヒヒの子が落ちて、草の蔓に掴まって必死に流されまいとしているの」
京子は言葉切った。明彦はベンチにうずくまったまま動かない。

「白いライオンは、マントヒヒの子を助けようとするんだけど、その子はライオンを恐がって手を放してしまう。流れて行く子を見つめながら……」

明彦は顔を上げた。

「その白いライオンはたてがみを振り乱してウオーツと吼えるの。白い月の下、草原をどこまでもどこまでもその悲しい声がこだましていく」

真近に京子を覗き込む目がある。

「哀しい目」

京子は、彼の目にかかった髪をかきあげる。

「私は恐がらない。あなたが誰でも傷つかない。あなたのツメでもキバでも傷つかない」

葉子は、伽耶子を出迎えた。彼女をガードする為、気付かれぬようにつけた者から逐一報告は受けている。明日には、笹原から京子に関する調査書類も届くだろう。伽耶子とは別に、葉子は葉子のルートから調べを進めていた。『明日』と笹原は言った。葉子は遅いと感じた。手間取っているのだと思った。情報収集は笹原の得意とする分野だ。一個人の身元を調べるのにたいた時間はかからないはずだ。

「京子さんと会ったけど……」

伽耶子は同じように心配している姉に少しでも自分の見たことや感じたことを伝えなければ、と思った。

坂崎というネームプレート。純子という子の話。頼子という名前。母親の口から出た本多病院という名称。立ち聞きしてしまった父親のこと。たどたどしくもそこまではどうにか言葉に置き換えられたが、最後に京子とすれ違った時見たあの映像は、どう説明したらいいのだろう。

「今日は、このくらいにしておきましょう。一日にたくさんことを体験し過ぎてしまったのよ。ゆっくり寝て、また考えましょう」

葉子は妹を労って言った。一人での初めての外出である。

アパートの前まで送った別れ際、明彦はやつと胸のつかえを口にすることが出来た。

「君を見たんだ」

京子の目は、真つ直ぐ明彦を見つめた。『いつ』とも『どこで』とも尋ねなかった。彼女は明彦の言わんとすることをすべて悟つたようだった。ただ、じつと明彦を見つめていた。陰りのない瞳だった。

「時間をちようだい。もう少し……」

やつと京子はそう答えて、アパートの方へ走り出した。明彦は一人道を戻り始める。宣告を先に延ばされた安堵感だろうか。京子の話した白いライオンの話。彼女は傷つかなかった。

だから、ずっと離れていかないということなのだろうか。自分は何を恐れているのだろう。母の死、父の死、肉親を失うたびに、自分の中のどこかの部分がどどん臆病になっていく。京子の心を信じながらも、信じきれない何かはそのせいかもしれない。

「待って！」

京子の声が後ろから追いかけて来た。振り返ると二階の手すりから身を乗り出すように彼を呼んでいる。明彦は戻った。

「部屋に寄って行って、話を聞いて欲しいの」

そう言いながらも、彼女の目にはどこか迷いが見えた。

部屋の中はこざつぱりと片づいていたが、年頃の娘の部屋にしては少し殺風景な感じだった。

「この住人はもう一人いて、それがあなたの見かけた私の双子の姉。坂崎頼子。本多病院という所に勤務してる。担当は精神科」

そこまで話すと、後はどこからしゃべったらしいのか、というように言葉を切った。

「姉はとても辛い人生を送って来たの」

京子はお茶を入れながらそう切り出した。

彼女の父親は、旧家の出で、オーケストラのチェロ奏者だったという。京子が七才の時、母親は子供を連れて家を出た。連れ戻されるのを恐れて実家に戻ることも出来ず、姿を隠して点々とするうちに病気で死んだ。その後、子供は施設に入れられたが、父親が刑務所に収容されると、実家の方でどうにか捜し出して引き取った。

「姉はもともと頭の良い人で、まあ、それから精神科医になった訳なんだけど……」

明彦は一口お茶を啜った。

「よくわからないな。どうしてお母さんはお父さんから逃げてたの？」

「家を出た原因は、父が姉に対して行った性的な虐待。父は姉に執着してた。ずっと捜しまわって、それでも見つからなくて……、刑務所に入ったのもそういう小さな子に対する犯罪。恐らく何処かが歪んでしまっているんだと思う」

「そのお母さんの実家っていうのは？ 自分の娘や孫がそんな目にあっているのに、ほつといたのかい？」

「親の子に対する権利って、すごく強いよ。そういう事って当事者じゃないとわからない。警察も法律も助けてくれない。」

狂った人間がそこにいることをどんなに叫んだって誰も助けてくれないわ。みんな自分が巻き込まれることを恐れるだけ。実家に戻って、父親や母親、弟妹に危害が及ぶことを考えたら……母は一人で子供を守りながら逃げ回るしかなかった。祖母も、たとえ孫を引き取っても父の異常を立証できなければ、親権を楯に奪われてしまうのがわかっていたから、手を出せなかった。

京子の目が明彦を見る。明彦には言葉もなかった。

「幼い子にとって家庭でそういうことが行われてしまうっていうのは、もう逃れる場のない大変なことだったと思うの。その後母の死で施設に入れられて、それでも姉は立ち直った。必死で勉強して自分のような子を一人でも多く救いたいと精神科医になって……」

明彦は頷いた。

「彼女を診てくれていたのが、本多病院の医院長。本当にいい人で、だから彼女もそうした医者になろうと頑張ったんだけど……そのお孫さんが、全部わかった上で姉にプロポーズしてくれたの」

「それが昼間見た人だったんだね」

「姉は幸せにならなくちゃいけないと思うの」

思い詰めた表情で京子が言う。

「二人の結婚に何か障害があるのかい？」

「父が刑務所から出て来て、ここが見つかってしまったの」

京子はいい澁んだ。

「あの日……一昨日の夜、車であなたを轢こうとしたのは父なの」

深い溜め息とともに京子は話し終えた。

二人は沈黙の中で、互いに相手が話しだすのを待っていた。環八を行き交う車の音が、遠く聞こえた。テーブルの上の目覚まし時計の音。台所からは冷蔵庫の音。

「刑務所か精神病院……君の姉さんを救うには、お父さんをどちらかに入れるしかないってことなのか？」

「そんな……大体、何かを起こしそうだというだけで刑務所になんて」

「人一人轢き殺そうとしたんだ。でも、どうして俺なんだ、姉さんの許嫁と間違えたってことなのか？」

「わからないわ、お父さん、もうなんか訳がわからなくなってるみたいで……」

「じゃあ、精神病院だろう」

「精神鑑定で責任能力有りと認められたから刑務所に入ったのよ。性格の極端な偏りは精神病とは違うって」

「自分の娘に手を出すなんて充分異常だよ。まったく、じゃあどうしたらいいっていうんだ。何をしたら君の姉さんを助けられる？　そうか、いつそ俺があそこで殺されちまえば、君の父親は刑務所に入れられたきりになってお姉さんはメダシメダシだったんだ！」

「馬鹿なこと言わないで！」

京子の声が震えていた。

「ごめん、言い過ぎたよ」

明彦は京子の肩を抱いた。

朝食の時、伽耶子は兄から昨夜の顛末を受け取った。静かな朝の膳は、三人とも味もわからぬままだった。明彦は自分の思いに沈み、葉子はそんな彼を見守り、伽耶子は兄の思念に囚われていた。明彦が出社していくと、伽耶子は柱にもたれかかったまま、座り込んでしまった。

「大丈夫？」

葉子が心配してくれる。

「わからないことだらけ……じゃあ、京子さんはその時どこにいたの？」

伽耶子が呟く。兄は京子の言葉を鵜呑みにしている。双子の姉の話をする京子。その話には姉しか出てこない。では、その時いっしょにいたはずの京子はどうしていたのだろうか？

玄関の方に人の声があった。笹原だ。葉子に依頼された調査書類を持って来たのだ。

「いっしょに考えてみましょう」

葉子はそう言うのと玄関へ出て行った。

(もう一度会ってみよう)

伽耶子はそう決心して、夕方、再びその部屋の前に来ていた。

京子の言ったことは大方報告の書類と一致していた。ただ一点を除けば。頼子には京子という妹はいない。

葉子は、本多病院の医院長に会いに行った。恐らく一番全体像の見えている人物に違いない、と考えたのだ。葉子は、頼子がこの八方塞がりの状況をどう打開しようとしているのか考えていた。父親が、頼子の婚約者と間違えて明彦を殺し、刑務所に入れられてしまう。あるいは、明彦が身を守る為に頼子の父を殺してしまう。そうしたら、頼子は父親から解放されるのではないか。考え過ぎに違いない。違いないけど、それしかないように思えてしまう。

(でも……)

伽耶子は、純子の「頼子お姉ちゃんのこと大好きだよ」という言葉を思い起こしていた。

頼子は明彦という存在を知っているのだろうか？

考え込む伽耶子の耳に、階段を上って来る足音が聞こえた。

「まあ、そうですか」

「そんな訳でなかなか予定が立たなくて、つい連絡を取り損ねて、お手数をかけて申し訳ありません」

「いえ、別にいいんですよ」

声の主は初老の婦人と……あの時一瞬京子の記憶に見た、車を運転していた男。頼子の父親だった。

婦人は鍵の束の一つで、頼子の部屋のドアを開けた。そして、そこに佇む伽耶子に声を掛けた。

「あなた、坂崎さんのお友達？」

「えっ、はい……」

「頼子を待つてゐるんですか？」

父親の声は、思ったより穏やかで柔らかい。

「こちらはね、坂崎さんのお父さん。仕事で急に東京へ出て来られたんですって……。あっそうそう、私はね、このアパートの大家なんですよ」

初老の婦人は、人の好い笑顔を見せた。

「あなたも、中で待たせて頂いたら。そろそろ坂崎さんも帰つて来る頃でしょう。じゃあ私はこれで」

「どうもお世話様でした」

大家が帰って行つて、二人になると伽耶子の心臓は早鐘のように鳴り出した。

「良かったら中で待ちませんか？」

頼子の父親は、髪の後半以上の白くなった七十才に近いような男だった。あの調査書では確か頼子は四十才の時の子で、その頼子が今二十七才になっているのだから……。

「どうぞ」

ドアを開けて、中へ招くその男に伽耶子は返事も出来なかつた。

男の目が鋭く光る。あきらかに怯えている伽耶子の様子は、男に不審を抱かせた。

「お名前は？」

伽耶子は後ずさつた。そして、身を翻して階段に向かおうとした時、その年とった男の骨ばつた手が伽耶子の手首を掴んだ。一瞬に、少女達、この男の毒牙にかかった幼な子達の姿が何万分の一秒のフラッシュバックとなつて伽耶子の中に写つた。憤りと冷汗。そして、吐き気が波のように彼女を襲つた。伽耶子の意識は闇の中へと逃げ込んだ。

どのくらい経つたのか。伽耶子は手足を縛られ、猿ぐつわをかまされて、押入れに放り込まれていた。電話の音、それが彼女を現実に取り戻したのだ。

「はい、坂崎です。いえ、あっ、そうですか。待ち合わせ？ 私には大家として、実は急に具合が悪くなつて入院しまして……病院へ？ でしたらその前にこちらへ寄つて頂けますか。荷物を持つて来てくれるように頼まれて、今ここに来たんですが、ええ、そうですね。持つて行つて頂ければ助かるんですが」

電話の相手は、兄に違いないと思つた。どこから電話してきただろう。駅や公園ならここまで何分もかからない。どうしたらいいのか。手足が痺れていて動かない。頭の奥に靄がかかっている。暗闇の中では、自分の体がどうなつていのかもよくわからない。

(あせつちやだめ。落ち着いて……)

伽耶子は自分に話しかけた。根気よく少しずつ体を動かすと押入れのはじめに少しだけ明かりが差し込んで来た。覗くと、男の姿が見えた。包丁を手に、ドアの脇に立っている。

(兄さん、来ちゃだめ。お願い来ないで！)

体ごと押入れの襖にぶつかってみる。ドアをノックする音がした。

(間に合わない！ 兄さん、兄さん！)

「どうぞ、入って下さい」

男の返答は平静な声だった。ドアのノブが回った。

(兄さん、ダメ！ 包丁を持つてる、あぶない！)

兄の姿が見えた。男が包丁を手に切りつける。襖を倒して、伽耶子は部屋に転がり出た。明彦の身のこなしは、男よりずつとすばやかだった。包丁をかわして、男の手を思い切り叩いた。

男は包丁を取り落とし、それを拾おうと屈んだ。その脇腹を明彦が蹴り上げる。鈍い音がした。明彦の反撃はあまりにも的確だった。老いさらばえて、肋の浮いた体をひっくり返し、腹をかきむしるように押さえながら、男は苦しんでいた。明彦はズカズカとその男に近づき、衿を掴んで吊るし上げるように起こした。握りしめた拳を、弓を引き絞るように後ろへ引く。伽耶子は思わず目をつぶった。

「待って！」

女性の声が飛び込んで来た。モスグリーンのジャケットを着た女性が、明彦の拳にとりすがった。京子…… いや、それは

頼子であろう。同じ顔を持ちながらも、ずっと年上に見える意志の強い表情を持っている。明彦に攻撃の意思がなくなつたのを見て取ると、身を離れた。

「お願い、手を放して」

明彦は、男を放した。男は畳に崩れ落ちた。いやな臭いがした。失禁している。

頼子は立ったまま、その男を見下ろしていた。汚い男だった。

自分より弱い者、小さい者、無垢な者としか関われない。頼子の最も大事な時間を、母の腕に抱かれてまどろむ時代を踏みにじった男だ。

頼子の大事にしていた人形の首を、彼女の目の前で、その大きな手でひきちぎった。それが、どれほど幼い頼子に恐怖を与えたことか。繰り返して、自分の首が引きちぎられる夢を見た。自分に加えられた凌辱に、故もない罪悪感を持たせられ、人に知られたら生きていけないのだと小さな胸に信じ込んでいた。頼子にとつて、大きな男だったのだ。人生に立ち塞がって、その先が全く見えないほどに大きな男だった。夢や希望といったものが、彼の背に隠れていると信じる気持ちも抱かせぬほどに、黒々とそびえ立っていた。

それが今、年老いて醜く縮んでいた。若い男に蹴られてペンをかいている。

「もう、この人に私を犯すことは出来ない」

頼子は、呟いた。止めどなく涙が溢れてきた。

「それでも、この人は私の父なんですわね」

明彦にともなく、自分自身にともなく、言った。

明彦は、伽耶子の縄を解いた。

「良かった、無事で」

伽耶子がそう言うのと、

(声が聞こえたんだ)

と明彦が答えた。

その時、まるで天女の衣が振りかかるように、頼子が明彦に抱きついた。

「ありがとう」

そうささやきながら、明彦の唇に、小さな形の好いその唇を重ねた。一瞬のキスだった。

「京子」

明彦は呆然と相手を見つめた。あの真つ直ぐな目が彼を見つめ返す。次の一瞬で、表情が変わり、頼子に戻っていく。

「ありがとうございました」

背筋を伸ばした彼女は深々と頭を下げた。

葉子の前で、その医院長はやつと頼子のことを語り始めた。

医者として患者の秘密を口にするには、許されないことである。が、葉子の必死の説得は彼を動かした。いや、それ以上に彼自身、葉子の抱く頼子への疑惑を晴らしたかったのかも知らない。

「確かに一つの症例として、彼女はまれにみる貴重な存在であったかもしれない。けれど、私がこうして長年付き合ってきたのは、医者と患者という立場を越えて、彼女の人格に魅かれたせいなのです。彼女は素晴らしい女性です。孫は見る目が高いと思っていますよ」

「彼女が初めてこちらへ来たのはいつ頃ですか」

「母親と家を出る少し前、彼女が七才の時ですわね。しかし、多重人格ではないか、と思いついたのは、もつとずっと後のことです。言語が豊富になって、もともと非常に頭の良い女性です。からね、様々なことを明確に語ってくれました。父から受けた虐待、それに耐えるうちに生まれた友人達、彼女たちが個々に持つ記憶と共有する記憶」

多重人格については語り尽くせない部分がある、と医院長は言った。未知のことが多いのも確かだが、人の精神については、個人差やそれを判断する医師の技量にも差があり過ぎて、はっきりとした定義は出来ない、とのことだった。

頼子の場合、もとのキャラクターの他に五人の性格も年齢も違う少女達がいたという。普通の生活の中で現れてくる者、緊急の時に力を発揮する者、それぞれに多少の役割分担のようなものがあつたようだ。その上各自の記憶は、他のキャラクターのやっていることを知っている者、全く知らない者まじりで、都合の悪いことを他の人格に隠したりすることもあつた。

「しかし……」

「院長は、全て過去のことであったはずだ。と最後に付け加えた。父親と離されてからは、彼女は次第に落ち着きを取り戻し、自分の精神状態から逃げるのではなく、冷静に分析、判断することによって人格の統一を図り、成功したはずだと……。」

葉子は京子と明彦を思った。明彦の恋が、頼子の多重人格の中の一人とのものであるとしたら、いったいどうなっていくことが、恋が実るといふことなのだろう。

翌日は、日曜日だった。明彦は布団の中でぼんやりと天井の木目を見ていた。外が白み始め、しだいにはつきりと木目が浮き出て来る。やがて日は高くなり、障子の外に生活の気配を感じる。それでも明彦は布団から出る気にはなれなかった。何を考えているのか……、自分でもよくわからなかった。頭の中に空白の部分が生まれて、時の過ぎていくことを感じられなくなってしまうような気がした。

「兄さん」

廊下から伽耶子が声をかけてきた。

「今、坂崎頼子さんがみえてるんだけど」

明彦は起き上がった。

「お詫びに……」

「今、行く」

明彦は着替えながら、胸が苦しいような錯覚にみまわれた。部屋に入って行くと、葉子と頼子が向かい合って座っていた。

明彦は軽く会釈して部屋の隅に座った。伽耶子がお茶を運んで入ってきた。頼子が手をつけて、頭を下げた。

「本当に申し訳ありませんでした。父のしたことは、こんなにとぐらいでは……」

「頼子さん、あなたが謝ることはないわ」

葉子が頼子の手を取って言った。

「私たちは、あなたのことを心配しているだけ。あなたは、大丈夫なの？」

頼子は、まじまじと葉子の顔を見た。

「どうしてそんな風に、言ってくださるんですか？」

それは、難しい質問だった。頼子自身は今回の出来事をどれほど把握しているのだろう。葉子は、明彦に気を使いながら、大まかに説明をした。

頼子の理知的な瞳は、じつと話に聞き入っている。そして、今度は自分のことを、そうすることが彼らに対する謝罪である、とでもいうように話し始めた。

「初めは、京子の存在には気がきませんでした。

私が幼い頃、あの旧い家でいっしょに遊んだ五人の少女達の中に、彼女は居ません。私の中に住む他の人格達は、父の虐待を共に耐えてくれる友人達でした。パズルの一部分を手にしていくように、記憶は共有されず、私はそのことによって救われていたのかもしれない。

父のしていたことに気付いた母は、私を連れて家を出、本多

医院長の治療で私は完治したはずでした。

私は医者になりました。でも、忙しい日々の中でも、片時も父のことを忘れたことはありません。いつか父は私を見つけたし、私の目の前に現れるに違いないと思っていました。その時、私は一人前の人間として父に立ち向かわねばならないと……。

そして、一週間前、その日がやって来たのです。父が突然会いに来ました。私は……、だめでした。あんなに何度も何度もその日の来ることを考え、心の整理をし、父に言いたいこと、どれほど罵ってやりたいかを思っていたはずなのに、私の中にあつたのは恐怖でした。理性も何も弾け飛んで、ただただあの幼い日に味わった恐怖に鷲掴みされていました。その後の記憶はスッポリとありません。私には、誰かが助けてくれたのだとわかりました。幼い日、いっしょにお手玉をした仲間達を一人一人思い浮かべてみました。その名前を何度も自分の中に呼び掛けてみました。でも誰も意識の表層、スポットの当たった部分には現れてきませんでした。

職場の同僚や近所の噂で、その後も父が私の周辺を調べまわっていることは知っていました。でも、どうしたらいいのか。私のプライドはもうズタズタでした。この十数年の積み重ねは、何にもならなかったんです。私は父の前でただの幼い無力な子供に戻ってしまい、完治したと思っただ多重人格の症状が現れた、最悪の状況でした。病院から家に戻った時などに、あの時間を盗まれる、という感覚を味わいました。夕方部屋のドアを開け

て、その次気付くと私はもう布団に入っていて、時間は十二時を過ぎていました。

ところが一昨日、彼女は私にコンタクトをとってきました。記憶のスポットから追ひ払われ、闇の中に押しやられていた私に声を掛けてきたんです。

「あなたの過去を人に話してもいい？」

彼女は遠慮がちにそう尋ねてきました。私はすぐにそれが、父から私を救ってくれた人物であるわかりました。年はわかりませんが、私よりずっと若いと思います。でもまぶしいような何かを持った子でした。明彦さんに私の説明をしている時、私は頼子の、いえ京子の中で見ていました。二人のことを……。

「どう言ったらいいのか」

頼子は言葉を切って明彦の方へと向き直った。

「京子は、ちょうど一週間前の日曜日に現れ、昨日去っていききました。なんと説明したらいいのかわかりません。でも、確かにもう私の中に存在しない」

頼子の視線が、痛ましげに自分へ向けられることが、明彦には耐え難い苦痛だった。それを察して、彼女は話題を京子から離れた。

「これから、私は、父の面倒をみていくつもりです。ここで私が見捨てたら、あの人は野垂れ死にするか、また犯罪を犯して刑務所に入れられるかです。今までがどうあろうと私の父には違いありませんし、私はもう小さな子供に後戻りしたりしませ

ん。父に付け入られる隙のない大人の娘として、彼の残りの人生を見守って行くつもりです」

「結婚は？ プロポーズされたって聞いたけど」

葉子の質問に、頼子は微かに首を振った。

「断りました」

伽耶子は、声の上にその時の場面を見た。若い医師は『僕は君のそういう所に魅かれたんだ。だから今は我慢する。諦めた訳じゃないよ』そう答えて笑った。

葉子もまた、頼子の未来がどの様な形であれ、幸せなものになることを信じて疑わなかった。彼女のオーラは、鈍い白銀に輝いている。

玄關で、門へ向かう頼子の後ろ姿を見送った。柱の陰に明彦がいた。目が頼子を追っている。

（なぜ気付かなかったのだろう。京子を失ってしまったのだ、というこの事実）

明彦は、周りの空気が消えていくように息苦しかった。

（姉を救いたいと言っていた。頼子を父から守る為に、京子は生まれたのだろうか。そして、役目を終えて消えてしまった。

役目を終える……自分はその手伝いをしたのか。京子を消してしまいう手伝いを……彼女はそれで良かったのか。頼子ではない、京子自身の幸せは？ 死んでも様々の生きた証を……少なくともその遺体は時をかけて土に戻る。だのに京子は、夢であった

と思えば、すべて消えてしまう。何ひとつ残せずに逝ってしまった）

足が動いた。一步二歩、頼子と呼ぶべきなのか京子と呼んでもいいのか、わからなかった。

「明彦」

葉子が、彼の腕を掴んだ。追っても仕方のないことだと、口には出せなかったが。

一瞬、葉子は周囲がすべて消えるのを感じた。

宇宙に投げ出されたのか、地球そのものが消滅して自分だけが残ったのか、そこは真空の闇だった。爆発、エネルギーが何かの形に力を奮い、宇宙が広がっていく。時がベクトルを持って流れ始める。旅が始まった。宇宙の地平に向かって、もの凄い勢いが広がる。その中で、何かつまづくものがあつた。なぜそこに立ち止まったのか？ 他のどれほどの星々の中で、なぜそれなのか？

時のベクトルが縮み、穏やかな青が広がる。生命の分散と集中が小波のように繰り返される。自分を導いているのは明彦。彼は捜している。生命を……

波間に漂う有機生命体。繰り返される生命の変化。注ぎ込まれる器は、進化していく。古代生物が闊歩する。恐竜の目が明彦の存在を感じて見開かれる。緑の甲虫が、天敵に喰われながら、明彦を恋て鳴いている。やがて哺乳類が現れ、人間という器が生まれる。明彦は生命を追う。器を失った生命が、その中

心に戻り、個を失つても、明彦は求め続けている。失いきれないその軌跡を。

遠い異国の風景。赤ん坊が川を流されて行く。粗末な蔓で編まれた籠に入れられて。見えない赤ん坊の目は、明彦を知っていた。彼は常に共にある。赤ん坊は、やがて恐れもなく水に沈んで行った。

戦地が見えた。砂漠の地。彼女はまだ若い。兵士の姿をして、倒れていた。傷は腹と肩にあった。今、まさに死のうという時、彼女の心は時の壁を打ち破り、自分が何を求めていたかを知った。繰り返される生命の中で、出会い続けた存在。彼を追い求めている。彼女は宙空に指し出した指先に明彦の存在を触れていた。

葉子の手にかかった重みに現実が戻って来た。明彦は葉子に腕を掴まれ、つまずきそうになりながら、体勢を立て直した。頭痛を押さえるように額に手をやる。今の一瞬の旅は明彦が連れて行ったのだと、葉子は感じた。頼子の姿が門の向こうに消えた。明彦は、家の中へ戻って行った。

日常が帰って来た。京子と会う、それ以前にあった普通の日々。顔を洗いながら、明彦はふと、小学生の時に習った歌を思い出した。

(日曜日に市場へ出かけ、糸と麻を買って来た。月曜日は……)

月曜日は何だっけ？ そうだ月曜日に会ったんだ。なんだ一週間前のことだったんじゃないか……)

たいした出来事ではない、と自分に言い聞かせようとしていた。そう納得するしかない。彼女は消えて自分は残ったのだから……。

月曜日のいつもの朝食。明彦は、いつもの無口な弟であり、兄であった。出社しようと立ち上がり、二、三歩歩いて、彼はカクツと膝を折りそうになってテーブルに手を付いた。

(何につまずいたんだろう)

というように、彼は足元を見た。別に何も無かった。

「行つてきます」

ボソツと呟いて出ていった。

明彦を見送りながら、二人の女はそれぞれに彼を案じていた。葉子は、あの明彦に触れた時、垣間見たものの意味を考え続けていた。一瞬であったのに、戻って来た時、自分は老婆になつてしまったような気がした。宇宙の始まりから明彦は京子を追って行ったのだ。戦地に倒れた女性は、彼女の前世であったのかもしれない。生命が源に還り、また転生する。そこにはすでに個を識別する何ものも残っていないはずなのに。

伽耶子の胸は、兄に対する心配で押し潰れそうだった。彼女が寄り添うと、大丈夫と兄は身を引く。兄は自分が心に受けた傷手に気づかないふりをしている。ロミオとジュリエットの悲劇は何日間の物語だったろう。人は一目で取り返しつかない

恋の深みに落ちていく。それに気付きながら、目を瞑ろうとしている。この一週間をなかつたことにして、恋を知る前の自分に戻れると信じている。心があんなにも悲鳴を上げているのに、体さえもがその軋みを感じているのに。壊れていく明彦のイメージが、伽耶子を不安に落とし入れる。

真夜中、電話が鳴った。夜の帳の落ちた廊下を裸足で姉が駆けて行く。電話の音の与えた緊張が空気を張る。

起き出した兄と廊下に佇む妹に、姉の受け答えが微かに聞こえた。

「それが……、はい、いえ、わかりました。とにかく伺います」
戻って来た葉子は、明彦に着替えていっしょに来るよう指示し、伽耶子に留守番を頼んだ。

「よくわからない電話なの。京子さんが会いたがつってるつて。とにかく行くだけ行ってみるわ」

葉子の手配したハイヤーに乗った。

「相手も混乱しているというか、興奮してて、よく事情が呑み込めないの。女性の声だったわ。あなたに会いたがつってるつて
「誰が？」

「時間がないから、とにかく来て欲しいって」
「なぜ、時間がないの？」

「電話の主は、あせっててちゃんと説明出来ないの。最後はも

う、お願いだから早く来て、早く来てつて繰り返すばかりで」
「京子つて名乗つたの？」

「ごめんさい。私が勝手にそう思い込んだの。あなたに会いたがつてるつて聞いて、彼女に違いないつて！」

明彦は黙った。明彦もそう思っていた。自分が会いたがつてるつて京子も会いたがつてるつてに違いない。

でも、彼女との再会というのは、どのようなものなのだろう。

葉子は考えずにはいられなかった。男？ 女？ 年齢は？ あの幻が蘇る、明彦の見せた幻。今の京子は人間なのだろうか？ 車は大きな私立病院前で停まった。

入つてすぐ、電気の消えた誰もいない広い待合室に女性がいた。

「明彦さん、あなたが明彦さん？」

明彦が頷くと、その手を握つて引つ張つて行つた。

「早く早く、間に合わないわ、早く」

三十五、六のその女性は謔言のようにそう吹きながら、三階の奥の部屋に向かって走つて行く。ドアを開けると、中には一つだけベッドがあり、その周りに医者と看護婦がいた。一目で最期を見取ろうとしていることがわかつた。

「京子、目を覚まして京子」

女性はそのままベッドに取りすがり、医者に制止する間も与えず、患者の体につけられた管を外した。思わず周りの人々が身動いだ。ベッドの主が、スーッと目を開け、起き上がったの

だ。

それは、七、八才の少女だった。痩せ細った白い小さな顔。肩までの髪。けれど彼女は、そこにいる誰もが今までの人生で一度も見たことのないような至福の笑みを浮かべ、明彦に手を差し延べた。

(京子に会えた)

明彦は、ゆっくりベッドの縁に腰掛けた。骨ばかりの腕で、京子はその首に抱きついた。少女の背を明彦の手が覆うように抱き締める。何の言葉もなかった。

(会えたのだ)

そこにいる誰の胸にも共通の理解があった。

(長い時間をかけて、会えたのだ)

抱擁は、僅か数秒のことだったかもしれない。朝が始まろうとしている今、ベッドに横たえられているのは、八才の病み疲れて痩せ細った子供の亡骸だった。恋に勝利した女神はすでにいなかった。明彦は再び取り残された。京子は去ったと、頼子の言葉に教えられた。でも、今は違う。この手で彼女を抱き締め、事切れる瞬間を知った。

(会えた)

という至福を味わい、次の瞬間、失ったという現実にと落とされ

葉子は部屋の隅で憔悴した母親の話を聞いていた。話の途中、彼女の視線は何度も明彦に注がれた。

一年程前、彼女の娘、京子は交通事故で、この病院に運ばれた。生きているのが不思議な程だった。昏睡状態となり、一年間眠り続けていた。それが一週間前に突然目覚めた。母親は最初、京子の話すことをただの絵空事と聞いていた。長い間眠り続けた娘の子供らしからぬ作り話に、不安を感じていた。そして、次には前世というものを考えた。作り話にしては、あまりにリアリティがあり、その上、その中に登場する京子はすでに大人の女なのである。

日常から逸脱した世界がそこにあった。母親は何の打つ手立ても知らなかった。そして、一昨日、再び危篤状態に陥った。もう完全に医師たちから見捨てられながら、それでも生にしがみついている娘を見た時、この子はその男に会う為に生きているのだと悟った。この一年必死に生き抜いてきたのは、明彦というその男に会う為なのだ。

逸る心を押さえながら、彼女は必死で娘の話を思い出した。言葉の端々にあった風景、人物。居もしない人間を捜している。病人の戯言に過ぎない。そう思う気持ちを振じ伏せて、ついにその電話番号を突き止めたのだ。

そして、自分の目で、今はつきりと娘の恋した人物を見た。その話にあった通りの背の高い、遠い目をした若者。

「ありがとうございます。来てくれて……ありがとうございます。良か

った。もし会えなかったらあの子は幽霊になっても捜し続けるんじゃないかと思ってました。私にとつては、こんな不思議な話、今こうして話していても夢のようで。でも、弟さんを見た時、すぐに明彦さんだとわかりました」

そう言つて、二人の視線が再びベッド脇に移った時、そこにはすでに明彦の姿はなかった。

葉子は慌てて病院の外に出た。辺りを捜し回つてもその姿はなく、ハイヤーで家に戻るしか当てはなかった。

明彦と京子の恋。それはどこが始まりでどこが終わりだったのか。明彦は電車の中で初めて彼女を見た。京子が消えると、その跡を追つて時をどこまでも逆上つた。京子は生命の始まる前に明彦に出会つた。人間という器を持つ前、地球という星に囚わる前、彼女を捜し求める明彦の存在と出会つていた。繰り返される生命の中で幾たびも彼に出会う。それを恋と呼べるか。しかし、神を恋するのも、人を恋するのも、同じ熱さの中。ふたたびの恋は、今ようやく彼の時に追いつき、その命の最期の一瞬に二人を出会わせた。これは何なのだろう。運命というものなのか。明彦の中に因子が潜んでいるのか。それとも誰かの、いや何かの意図が働いているのか。

ただわかっているのは、すべて終わったということ。病室で葉子は、京子のオーラが全く損なわれた部分のない完璧な輝きを見せて消滅したのを感じた。生命の源に環り、例え再び転生してももう明彦にはわからない。京子の恋は成就して、個への

執着は消え去つた。

「ただいま、明彦、帰ってるの？」

玄関で声をかけても、答えはない。家の中には伽耶子の姿さえ、見当たらなかつた。庭に出て捜した。森を奥へと入つていく。木立ちが終わつて、向こうの池まで開けた空間が広がる。そこで葉子は、やっと明彦に追いついた。水辺に座り込んだ明彦は、小さくうづくまつている。安堵の溜め息がもれた。何を心配していたんだか。葉子は、自分で自分の慌てふためいた様子を笑つた。もうそんな馬鹿なことを仕出かすような子供じゃないわ。

反対側の木陰から、伽耶子が姿を現した。葉子には気付かぬ様子で兄に近づいて行く。明彦も、伽耶子の気配に顔を上げた。立ち上がろうとしてか、あるいは伽耶子にも隣に座るようということなのか、明彦が手を指し出した。それに答えて伽耶子が手を出す。手が触れたか触れぬかで、伽耶子がそれを引つ込めた。一歩後ずさる。遠目で二人の表情をはっきり見ることは出来ない。しかし、葉子は、この二人の間に走つた驚きを明確に感じ取つた。それは、怯えといつてもよいような衝撃だった。伽耶子が身を翻して走り去る。明彦はのろのろと立ち上がつて、果然とその後ろ姿を見送つた。

日が傾き始める頃、伽耶子の部屋を訪ねた。畳に俯したまま、

泣き疲れたという風情だった。

「どうしたんだか、話してくれる？」

葉子に言われて、彼女の前に座った伽耶子は、何か言葉を発すると、又涙が溢れてきそうだった。

「明彦が荷物をまとめてたわ。ここを出て、しばらくはホテルで暮らすって。その間に住まいを見つけて引越すと言っていたわ」

「そんな！」

伽耶子はそう言ったまま、もう涙が溢れて言葉が継げなかつた。

「二人の間に何があったのか、私は知らないわ。明彦がそうしたいなら、それも仕方ないと思う。でも、話し合っつて。このままじゃいけない、そうでしょ」

伽耶子の口から嗚咽が漏れる。

「私が、こんなこと。兄さんに見捨てられるのを何より恐れてたくせに！」

葉子は口を挟まず、じっと耳を傾けた。

伽耶子はあの時、兄の指し出した手から、自分の手を引いてしまった。明彦の表情。それは、まるで幼な子が何の疑いもなく信じきっていた母に、突然手を振り払われたような、そんなただボカンと驚いている表情だった。裏切りを犯したのは自分の方だった。自分の方だった。自分の方だった。兄が最も辛い時に、苦しんでいる時にその手を振り払ってしまった。あの兄

の表情を思い出すと後悔で胸が張り裂けそうだった。

「にさんは、もう私を許してくれない」

それだけ言うのがやっとだった。後は泣きじやくりがこみあげてくる。

「困った兄妹ね。明彦は明彦で、あなたを傷つけたと嘆いていたわ。周りの人間からあなたが傷つくことのないようにと、あの子はあの子なりに必死に守ってきたんだと思うのよ。それなのに、自分が傷つけてしまったと」

「そんな……」

「あなたにとって人の心は凶器だったものね。明彦の心だけが、あなたを傷つけることがなかった。あなた達は対の貝殻のように、手を取り合っつて、他者に身を閉ざしてきた」

「違う。兄さんは悪くないの。私が兄さんの中に見たのは……」

それは言葉で説明出来るようなものではなかった。兄の手が微かに触れた時、伽耶子は足元がスツと消えてしまう錯覚に襲われた。下には青い空間が広がっていた。空のような海のような、真つ青な空間。怖かった。ただ無性に怖かった。兄は、その時の自分の怯えを感じとつたのだ。

「兄さんの心に、怯えたのは私が弱くて未熟だから」

「そう」

葉子は、溜め息のような相槌を打った。

「京子さんから兄さんの受け取ったものは、私みたいになつぽけでは溺れてしまうの」

二人は向き合ったまま、しばらく言葉を探していた。微かな玄関の音。

「行ってしまおう」

葉子の言葉に伽耶子はビクリと立ち上がった。

「明彦の心が、京子さんを愛したことで変化してしまったのだとしたら、あなたがその心に触れると溺れてしまおうというのなら……」

伽耶子は兄を追って走った。

(溺れて死んでしまってもいいんだ)

伽耶子は思った。

(恐がることなんかはない。兄さんを裏切るなら、死んだ方がいい)

裸足のまま、三和土に下り、兄を呼んだ。

夕暮れの赤い光の中、長いシルエットの主がゆっくりと振り返る。手にしたスーツケースを下に置く。伽耶子は子犬のように、その体に飛びついていった。健康ななめらかな腕が、その首に巻きつく。

青い心。哀しい程に透き通った風景。水中を沈んで行くように、昇って行くように、上もなく下もなく、横も縦もない。その広がりの中で、伽耶子は兄の温もりだけを感じていた。そして、明彦もまた、伽耶子の温もりを感じた。京子を失った瞬間から、自分の心の絵の中に、すべての暖色が失われてしまった。

震えながら佇んでいた自分を、妹の体温が包んでいる。湖中から救い上げられた人のように、明彦はやっと自力で呼吸出来たと感じた。